伊良部島のカムス

――儀礼・歌謡・由来譚――

畠山　篤

はじめに

伊良部・仲地　宮古群島の一つである伊良部島（イラブジマ）の伊良部（イラブ）、仲地（ナカジ）は、親子の関係にある。すなわち、伊良部に隣接する仲地は伊良部からの分かれであり、伊良部をウマバラ（母腹の意）、仲地をフファバラ（子腹・子孫の意）という。そこで、この両村落の祭祀組織は緊密な関係を持ち、年中行事も共通して執り行っている。

カムス　本論は、この両村落の年中行事のなかからカムスを取り上げる。

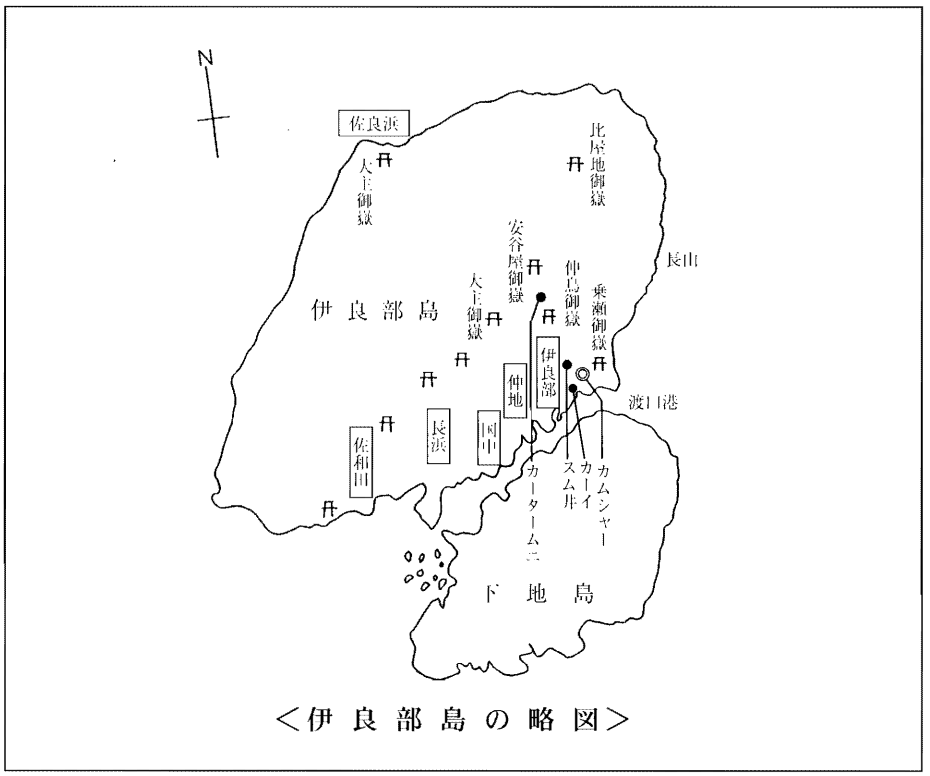
カムスはこの両村落が催す最大の年中行事で、祭りの主旨は海彼の他界から訪れる唐（トー）の神を主神とする諸々の神に、あらゆる世果報（スガフー）（幸）を祈願し、感謝するところにある。

カムスは旧暦一一月と一二月（以下、月日は旧暦）のはじめの五日間、ほぼ同じ形式で執り行われる。ただし、大川恵良（一九七四、一二二頁）に記すカムスの由来譚、ならびに同じ大川（一九七四、一二四頁）には、カムスの日取りは一一月か一二月に取られるとある。しかし、『伊良部村史』（一九七八、一二三六・一二三七頁、この項目の著者も大川である）では、カムスは一一月と一二月に執り行うと修正している。

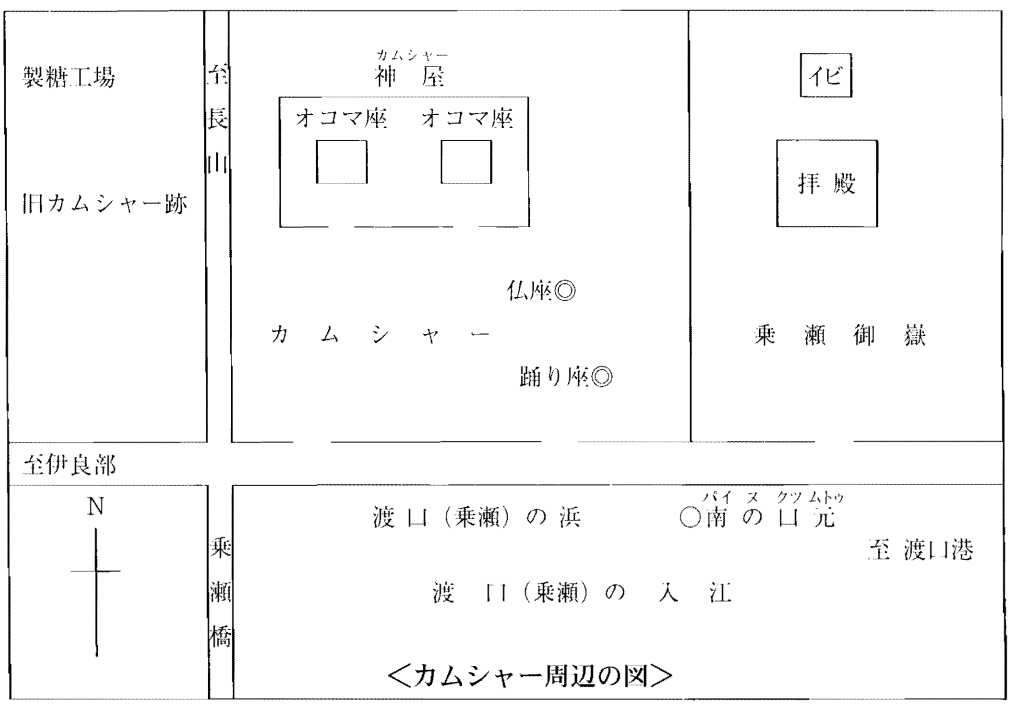
カムスとは神様ほどの義で、カムは神、スは敬称だという。このカムスを別にカムスオリともカンムリともいうが、これは神様降り（神降り）という義である。来訪する神は唐の神であり、この他に諸々の神も来臨する。唐の神は北風に乗って来訪し、三日目の深夜に南風を孕んだ船に乗って帰るといわれている。このとき四〇人のユーキウマが、この帰り船の船子（フナコ）を務めている。それで、このユーキウマを四〇（ヨス）の船子のオバーともいっている。五日目に祭りが終わって諸々の神がそれぞれの聖地に帰ることをカムスノーリといっている。これは神様上り（神様直り）の義だろう。

この祭りには厳しく男子禁制が敷かれ、とくに主神の唐の神が帰るという三日目の夜中御願（ヨナカウガン）は秘儀にされている。

本論のねらい　筆者がこの祭祀伝承を調査したのは、一九八二年（昭和五七）である。本論は、そのときの祭りを支える集団（祭祀組織など）、ならびに祭りの次第と歌謡（主に神歌）を記述し、この調査時より以前、あるいは以後に採録されている次第や歌謡と比較し、この祭りの構造と本義を明らかにしたい。それから、この祭りにおける儀礼、歌謡、由来譚（説話）のあり方（関係）を探り、カムスの由来譚がどのように形成され、機能してきたかを考えてみたい。



＜伊良部島の略図＞



＜カムシャー周辺の図＞

一　祭りを支える集団

伊良部・仲地の祭りを支える祭祀組織とその他の集団について略述する。

女性神役と村の女性　まず、祭りを支える女性神役と村の女性たちについて述べる。

司　村落の年中行事を司祭する司が、三名いる。その内訳は、伊良部に比屋地御嶽の司、乗瀬御嶽の司、そして仲地の司である。比屋地御嶽の司は元司ともいい、祭祀の最高責任者になっている。祭場での司の並び方は、いつも東に比屋地御嶽の司、中に乗瀬御嶽の司、西に仲地の司が座を占める。太陽の昇る東方が尊ばれているのである。

数え年五〇歳（以下、年齢は数え年）から六五歳までの女性が司の選考の対象になり、籤で選ばれる。伊良部の司は三年以上務めることを定められ、仲地は任期を三年に限っている。

皿のウマ　皿のウマは一名で、伊良部の女性が務める。「サラパヤシ」は普通、男性の皿の主が歌うが、カムスだけは男性を忌むので、一月の三日目のサラパヤシの儀礼のために皿のウマが選ばれる。ウマとは主婦・おばさんくらいの義である。すなわち、皿のウマはサラパヤシを歌うおばさん・神女ということである。五五歳から六五歳までの女性が選考の対象になり、籤で選ばれる。

ユーキウマ・四〇の船子のオバー　ユーキウマ（四〇の船子のオバーとも）は各一族・一門（父系血縁）から一名ずつ出る神女で、全部で四〇名いることになっている。終身職で、先代が亡くなると先祖の神前でその後継者を親族から籤で選ぶ。ユーキは世乞いの義で、ウマは前述したように主婦・おばさんくらいの義である。すなわち、ユーキウマは世（幸）を乞い受けるおばさん・神女ということである。

ユーキウマがかかわる村落レベルの年中行事は、カムスだけである。ユーキウマの職掌はカムスを司祭し、来訪神の唐の神に仕え、島に世（幸）を乞うことにある。ユーキウマを別に四〇の船子のオバーともいうわけは、唐の神の乗る帰り船の船子になることに基づいており、またカムスの由来譚（一）では別の伝承が語られている（後述）。

この四〇名の神女のなかから、先に立って神歌をうたうアヤグダツ一名を選ぶ。アヤグダツの語義は「綾言立ち」である。この役に欠員が生じて祭場で神歌をうたえなくなったとき、神歌を真っ先に口にした者がこの役に就く。

この他、ユーキウマ（四〇の船子のオバー）は元旦に一門の幸せを自宅で祈願し、また一門の新築祝いのときに家の祓い清めをして嘉例をつけている。この神女の一門における宗教的な働きが、もっと多岐にわたっていたらしいことは、後述する。

この神女の人数は、その名称が示すように本来四〇名だが、子孫が絶えたり、後継者に選ばれても拒否したりして、『伊良部村史』（一九七八、二六七頁）によると一九七八年には一八名に減り、調査時（一九八二年）は一六名になっている。平敷令治（一九九〇：二六五頁）によると、一九八七年には一一名にまで減少している。

家族の女性　祭りになると、神役を裏から世話するのが神役の家族の女性である。また、次に述べる男性の御願主やシヂューナレ、御願供の仕事は、事実上はその家族の女性が務めている。

村のオバーの組　さらに、カムスの三日目の家の繁栄祈願のために村のオバー（主婦）たちが組を組織している。この組は五五歳前後から上の主婦が任意に加入するもので、伊良部と仲地にあり、経済的に豊かな家を元にして活動している。そして、このオバーたちも前述したように一定の年齢になると、司や皿のウマになる資格を持つことになる。祭りをめぐる女性たちの連帯意識はきわめて強い。

男性神役と男性年齢階梯集団　次に、祭りを支える男性神役と男性年

齢階梯集団について述べる。

帳の主　帳の主は日取り主ともいい、年中行事の日取りを決める。伊良部の五〇歳から五五歳（適任者がいないときは六〇歳）までの男性が選考の対象になり、籤で選ばれる。この神役の任期は三年である。

皿の主　皿の主は「サラパヤシ」を歌う神役で、伊良部、仲地に各一名いる。五〇歳以上の男性が選考の対象になり、籤で選ばれる。この神役は三年以上務めることになっている。大川（一九七四、二三〇頁）によると、サラパヤシは伊良部、仲地の祭りのなかでも大きい行事だけで歌うという。

御願主　女性神役に仕え、祭りを支える男性年齢階梯集団の最高位に、御願主がある。御願主は別に御願ニンヂュともいう。この御願主には三三歳の男性がなる。この集団はカムスに直接かかわっていない。大川（一九七四、二二五・二二六頁）は、この御願主が一日日と五日日にカムスに参列していると記しているが、誤りである。

シヂューナレ　神女たちのために下働きする者として、シヂューナレ（シヂューナリヤとも）と御願供がいる。

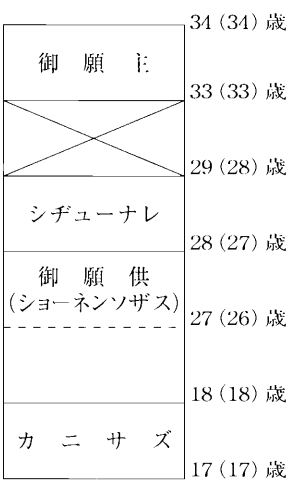
シヂューナレの語義は、村落の仕事に従う者ということで、伊良部では二八歳、仲地では二七歳の男性がなる。この年齢集団のなかから元を選び、活動の拠点にしている。全員がすべての年中行事にかかわっているが、カムスに限って一月は伊良部が分担し、二月は仲地が分担している。カムスでシヂューナレ本人が列席するのは、五日目である。

御願供　シヂューナレの指示で祭りの下働きをするのが、御願供である。御願供は別にショーネ（二とも）ン（少年の義）ともいう。御願供は、伊良部では一八歳から二七歳までの男性、仲地では一八歳から二六歳までの男性がなる。しかし、仲地では人口が少ないので、臨時の措置としてさらに一八歳から二六歳までの女性も加えている。この御願供（ショーネンとも）の最年長組（二七あるいは二六歳）をショーネ（二とも）ンソザス（少年長の義）といい、この集団にも元を置く。この元を中心にして年頭に仕事の分担を決めている。カムスで御願供が務める日は、一日日である。

なお、カムスは男子禁制の祭りなので、シヂューナレにしろ御願供にしろ、その仕事のほとんどは割り当てられた者の代理として家族の女性が務めている。

カニサズ　平敷（一九九〇、三六六・三六七頁）によると、最年少の年齢集団として一七歳の男性が構成員になるカニサズがある。これは祭りの連絡係で、分担区域の家を訪ねて祭りへの参加を依頼している。戦前は土間にひざまずいて大声で口上を述べたという。

男性年齢階梯集団の図　以上、男性年齢階梯集団を図にすると、次のようになる。



〈男性年齢階梯集団の図〉
＊（　）は仲地の場合である。

女性神役と男性年齢階梯集団のリンク　年中行事において女性神役は村人（とくに男性）の繁栄を祈願し、祈願される村人が祭料を出して女性神役に仕えている。平敷（一九九〇、三七七頁）は、カムスが女性神役継承制と男性年齢階梯制を巧みにリンクした祭りだと説く。

後述するように、村人の繁栄を祈る神女とそれを支える男性年齢階梯集団の円環的な関係が、カムスの由来譚（一）に反映していると考えられる。

月日	時刻	次第	場所	司祭者	歌謡
一〇月		日取りの決定	帳の主の家	帳の主	
祭りの一・二日前		神酒作り			
一一月	午前	カムシャーの準備	カムシャー	司	
一一月一日	午後	カムスオリ（カンムリとも）	仲鳥御嶽	司	
			安谷屋御嶽	ユーキウマと司	Ⅰ、Ⅱ、カンナーギアヤグ
			カーターム三スム井	ユーキウマと司	Ⅱ、カンナーギアヤグ
	夜	オコマ願い	オコマ座	ユーキウマと司	Ⅱ
一二日	朝	朝踊り	踊り座	ユーキウマと司	Ⅰ、Ⅱ、カンナーギアヤグ
	午前	御役座（ウイカブンとも）	踊り座	ユーキウマと司	
	午後	名主	仏座	乗瀬御嶽の司	
	夕方	夕踊り	踊り座	ユーキウマと司	Ⅰ、Ⅱ、カンナーギアヤグ
	夜	感謝の儀礼	オコマ座	ユーキウマと司	
	朝	朝踊り	踊り座	ユーキウマと司	Ⅰ、Ⅱ、カンナーギアヤグ
	午前	個々の祈願	オコマ座、踊り座、仏座	ユーキウマと司	
三日日（ナハヌトゥカ）	午後	家の繁栄祈願	乗瀬御嶽	ユーキウマと司、皿のウマ	カンナーギアヤグ、サラパヤシ
	夕方	大漁の模擬演技	南の一元、カムシャー	司	魚取り
		夕踊り	カムシャーの前の道	ユーキウマと司	カンナーギアヤグのクイーチャー
			踊り座	ユーキウマと司	Ⅰ、Ⅱ、カンナーギアヤグ
	夜中	夜中御願	カムシャーの前の道	ユーキウマと司	フナウサギ、Ⅱ
			神屋の入り口の前	ユーキウマと司	カンナーギアヤグ
四日日	（一二日日と同じ）				
五日日（マンサン）	朝	朝踊り	踊り座	ユーキウマと司	Ⅰ、Ⅱ、カンナーギアヤグ
	午前	マンサンの拝み	踊り座	ユーキウマと司	
		カムスノーリ	村落の入り口	ユーキウマと司	カンナーギアヤグのクイーチャー
			カーイ	ユーキウマと司	カンナーギアヤグ

＊神歌のⅠ、Ⅱは、神の声あるいは警蹕である。

二　一一月のカムス

1　一一月のカムスの次第一覧

一九七〇年代の次第　一九七〇年代の祭りの次第が、大川（一九七四、一二三～一三〇頁）と『伊良部村史』（一九七八、一一六三～一二七九頁）に記述されている。筆者が調査した時（一九八一年）の次第と若干の相違があるので、これらを参照しながら祭りの次第を記述していきたい。

一一月のカムスの次第　一一月の祭りの次第は、上の表のとおりである。

2　祭りの準備

まず、祭りに至る前段階を述べる。

日取りの決定　一〇月になると北風（スカン）がしきりに吹くようになる。ユーキウマたちは唐の神がくる時期が近いといって、不幸のあった家や病人に近づかないように身を慎む。唐の神は北風に乗って来訪するというので、北風によって神女の精進が促されるのである。この様子を見て、司は帳（ハリ）の主（ヌシ）のところへ行き、祭りの日取りを決めてもらう。日取りは一一月と一二月のはじめに取られている。

神酒作り　祭りの一・二日前に神女たちは神酒（ミキ）を作る。この祭りの神酒は、芋神酒あるいは粟神酒である。芋神酒の場合、唐芋を煮て潰し、粟神酒の場合は粟を臼で粉にする。これ以後の過程は、どちらの場合も次のように同じである。麦で作った麹をこれに混ぜ、粉になるまで強く練る。これに水を混ぜて密閉すると、二日ほどで発酵する。

3　一日目

祭場の準備　祭りの一日目は、祭場の準備から始まる。カムシャーを清掃し、祭具を整える。カムシャーはカムスヤーともソージヤーともいう。その義は神屋、精進屋である。神女たちはここに籠もるのだが（それで夜籠もり屋ともいう）、この神域一帯をもカムシャーといっている。

最初にカムシャーに入る時、司三名が祈る。次いで、神屋に入る時、東側の入り口を伊良部の司二名が祈り、西側の入り口を仲地の司が祈る。それから神屋のオコマ座を東西の順に拝み、神屋の清掃をする。オコマ座とは食べ物の神を祀った囲炉裏のことで、コマはカマともいい、釜の義だという。司たちはさらにカムシャーのなかにある踊り座と仏座を拝む。拝みの主旨は、なにもわからない司だが、神の選定にあって司を務めている、去年のカムスも上等にできたが、昔からの習いとして今年のカムスも神様のお蔭でうまくできるようにしたい、というものである。こうして、司が雑草を刈り取る所作をしてから、シヂューナレと御願供（ともに家族の女性）が祭場の清掃と祭具の準備にとりかかる。神域ではだれもがいつも裸足である。

清掃が終わると、渡口の浜から白砂を運んで、踊り座と仏座にこんもりと円く盛り上げる。この白砂は線香を焚く香炉の役目をしている。

カムシャーの位置　なお、祭場の中心になるカムシャーは、乗瀬御嶽の西隣に位置しているが、以前もっと西の広大な森のなかにあった。この聖地の近くに製糖工場が建設されたため、聖域の神聖さを守って現在位置に移動したという。その後、道路も敷設されて聖域が分断され、旧カムシャー跡は聖域の面影をまったく残していない。『伊良部村史』（一九七八、七五頁）によると、製糖工場が建設されたのは一九四九年（昭和二四）のことである。

後述するように、カムスは、儀礼をみても、由来譚（一）をみても、乗瀬御嶽とのかかわりが強い。その理由の一つは、カムスの主たる祭場のカムシャーが乗瀬御嶽に隣接しているからだと考えられる（後述）。

司の引く願い・就任願い　この年はたまたま司の交替の時期にあたっていたので、司の交替の願いが、清掃の後、オコマ座、踊り座、仏座の順に執り行われた。今までの司は七月をもって任期を終え、新しい司が八月から務めている。前任の司は晴れ着をつけて引く願いをし、次いで新任の司が晴れ着のうえに神の羽織り（白い打ち掛け・神衣裳）を着けて就任願いをする。新旧の司たちはシヂューナレの作ってきた村の神饌を神前に供え、線香を焚いて祈願する。司の交替の願いは、以下に述べる聖地でも執り行われる。

神饌　村（伊良部と仲地）から提供する神饌とは、次の一式である。角皿（大皿とも。左右に把手があり角のように見える）と一つ皿（世直しとも。コップ状の酒器）に盛りつけた神酒、フンチャバン（杯二個を並べた盆）に盛りつけた酒（泡盛）、花米（洗わない米）、洗い花（洗った米）、マーソクパン（塩の供物）、水花（飲み水）、イズクパン（魚の供物）、タバコなど。角皿の神酒にはガヂュマルの葉あるいは萱の葉を一枚添える。これをフサパネという。フサは草の意だが、パネの意がわからない。神酒を飲む前にこれで神酒をかき回している。こうしてみると、これらの葉は呪草であって、この植物の生命力を神酒に入れて、神酒の呪力を増大させているようである。

祈願が終わると、神饌をピューガッサ（食わず芋）の葉に盛りつけ、傍らに置く。以下、神饌の扱いはいつも同じである。

司の祈願　この後、司たちは神饌を改めてオコマ座、踊り座、仏座に供え、線香を焚いて祭りの成功を祈願する。司の祈願が終わるのは、昼ごろである。

ユーキウマの参集　一方、ユーキウマたちは九時ごろ神衣裳と神酒（ミキ）などの神饌を持って、比屋地（ヒヤーチ）御嶽の司の家に参集する。

ユーキウマの神衣裳　ユーキウマの現行の神衣裳は、司と同じく下袴（カカン）と白い神の羽織りである。しかし、以前は白くて地面に届くほど長い下袴をはき、上半身の各所に赤い紐を垂らした黒い服を着ていたという。この服には筒袖（てっぽう袖）がつき、ボタンもついていたという。これは中国服かと思われる。カムスの由来譚（一）によると、島の船子たちが唐（中国）に漂流し、そこで厚遇されて帰島したことに感謝してカムスが始まったというが（後述）、この中国風の神衣裳は中国に漂流したというカムスの由来譚（一）に通じている。

そして、この衣裳の上に白いガヂマタヂン（交叉して叉になっている衣の義）を着た。大川（一九七四、二二四頁）と『伊良部村史』（一九七八、二二六頁）によると、ガヂマタ衣はアジマタ（ジン）衣となっているが、同じことである。この上着は袖がとても長く、これを背中越しに左右に振り分け、それぞれ左右の袖に右と左の腕を通したという。交叉衣（クヂマタヂン）といわれる所以である。この神衣裳をすべて装っていた神女が一九四〇年ごろに一人おり、交叉衣だけを着た神女が二・三名いたという。

装草　この他、神女（ユーキウマと司）が神遊びのときに身につける草として、カウスとテブサ（タウサとも）、イツスクブがある。カウスとは神女が被る冠のことで、カムスバギ（神様葉木の義で、カニクサ）という蔓草からとる。テブサ（タウサとも）とは手草の義で、神女が両手に持って擦り合わせる呪木である。テブサはフショー木（ド）（琉球青木）の枝を用いる。イツスクブはギシツノハッパ（薄の葉）で作った帯で、これで神衣裳を締めている。

カムスオリ　カムスオリ（神様降り）の儀礼は、祭場の準備が整う昼ごろから始まる。

ユーキウマと司はそれぞれにお供を連れ、別々にまず仲島（ナカシマ）御嶽に向かう。

北風　大川（一九七四、二二四頁）は、カムスオリのために神女たちが仲島御嶽と安谷屋御嶽に向かうときに北風が吹くという伝承を記している。筆者も同じ伝承を聞いている。これは、主神の唐の神が北から来訪することを示している。

オプカニ御嶽遙拝　神女たちは、途中でオプカニ（ウ）御嶽を遙拝する。オプカニは乗瀬（メシ）御嶽の生き神であるタマメガ（女神）の父神である。

平敷（一九九〇、三五四頁）によると、乗瀬御嶽のイビには中央と手前左側に香炉があり、前者の香炉はタマメガを拝み、後者の香炉はオプカニを拝むという。カムスの由来譚（一）によると、乗瀬御嶽のタマメガもその父のオプカニ（ウ）も、カムスに大きくかかわっている（後述）。

仲島御嶽での神迎え　ユーキウマと司は仲島（ナカシマ）御嶽で合流し、神事を執り行う。司祭者は司である。

村（伊良部と仲地）から提供する神饌として、前述の一式ずつを神前に供える。これとほぼ同じ神饌を、ユーキウマも供える。

それから線香を焚いて祈願する。祈願の主旨は、今日からカムシャーにお籠りをして祈願するのでいらしてください、という神々への案内である。ここでは司が中心になって拝んでいるので、来訪神・唐の神以外の神々への案内だと考えられる（後述）。

安谷屋御嶽での神迎え　次いで、安谷屋（アダンヤ）御嶽に向かう。御嶽を清掃し、踊り座（ドゥスザ）に渡口の浜の白砂をこんもりと盛る。そして、前述の村からの神饌とユーキウマの神饌を供える。

ユーキウマはここではじめて神衣裳を着て、それぞれに定められた場所で祈る。病気や高齢のため列席できないユーキウマの代理人も、神衣裳を広げるので、祭場は盛観を呈する。司は白砂の上で線香を焚

き、ユーキウマとともに祈る。祈りの主旨は、神々の名をすべて挙げ、村人の繁栄を祈願し、これからカムシャーまでお供させてください、というものである。ここでは唐の神に仕えるユーキウマが中心になって司とともに拝んでいるので、この祭場に主神の唐の神が来臨していると考えられる（後述）。

大川（一九七四、一二五頁）と『伊良部村史』（一九七八、一六七頁）によると、この祈願のあと、ショーネンソザスなどの御願供（ウガントゥム）（実際にはその家族の女性）が神女たちを残して帰宅したという。これから本格的に神遊びが始まるので、一般の村人は遠慮したものと考えられる。

神々の出現　神女たちはカウスを被り、イツスクブを帯にし、テブサを手にして安谷屋御嶽（アダンヤ）の踊り座（ウドゥイザ）の前で円陣を作り、神遊びをする。神女たちは円陣の中心を向いて右へと歩を進める。この回り方を右回り（ミーマワーイ）という。これは共通語でいう左回りである。円陣の序列は、比屋地御嶽（ヒヤーン）の司、乗瀬御嶽（メーン）の司、仲地の司、ついでアヤグダツ二人、そしてユーキウマと続く。神歌の歌い方は、アヤグダツが一節ずつ歌い、他の神女が復唱するというものである。

最初の神歌は、次に示すように単純なものである。この神歌を便宜上、Ⅰとしておく。

ヤークヨ　ヤークヨ・・・・・ウルル・・・・・

テブサを上下に擦り合わせてリズムをとりながらヤークヨを繰り返すが、ウルル・・のときはテブサを使わない。ウルルは甲高い裏声である。この反復をして七回まわる。

この神歌の意味はよくわからない。しかし、これ以降、神々のお供をしてくる道中、ユーキウマたちはウルル・・と叫び、もし村人（とくに男性）がこの一行に会えばその者が不幸に見舞われるというので、このウルル・・は神の声あるいは警蹕だろう。こうしてみると、ヤークヨの語義は、後述する神歌に頻出するヤゴミ、ヤグミューイ（恐れ多い神の義）のヤゴ、ヤグと同義かもしれない。すなわち、恐れ多いよ、ウルル・・と神の声あるいは警蹕を発しているものと考えられる。この神遊びにおいて、主神の唐の神をはじめとした神々が出現したのである。その神々の名は、次に歌う「カンナーギアヤグ」のAに列挙されている。

神遊びを終えるとカウス、テブサ、イツスクブを円陣の中心に積み上げ、今度は手拍子で同じ神遊びをする。これを便宜上、Ⅱとしておく。

カンナーギアヤグ　次いで、拝殿に向かって五列ほどに横列し、「カンナーギアヤグ」（神を崇める綾言の義）を歌う。前列は司、次の列はアヤグダツ、以下はユーキウマが並ぶ。神歌の歌い方は、アヤグダツが一節ずつ歌い、他の神女が復唱する。最後の○の部分だけは別の曲で、全員で斉唱する。この時、みんなが両手を前に差し出し、掌を上に向けて上下させながらリズミカルに歌う。

次に、この神歌をあげる。本文は大川（一九七四、一二六～一二九頁）により、これに共通語訳を付した外間守善・新里幸昭（一九七八、二二二～二二四頁）から引用する。A・Bの段落区分は意味上から筆者が付した。

乗瀬お嶽の祭り歌（一）（伊良部島）

A　いつがむ　やらまいば　　霊力（いつ）神であられますので
　　ヤークヨ　オルルル　　ヤークヨ　オルルル
　　てんがなすの　おかぎん　　天加那志のお蔭で
　　やごみが　おかぎん　　恐れ多い神のお蔭で
　　ヘーガヨーノ　ユーヤナオレ〈以下略〉　　囃子。世は直れ〉
　　とよむぴゃーずの　おかぎん　　鳴響む比屋地のお蔭で
　　やごみが　おかぎん　　恐れ多い神のお蔭で

四　おこゆーぬぬす　おかぎん　　大世主のお蔭で
　やごみが　おかぎん　　恐れ多い神のお蔭で
五　んまぬぱの　おかぎん　　午の方（の神）のお蔭で
　んてゅーぬぬす　おかぎん　　満ち世主のお蔭で
六　ねのぱの　おかぎん　　子の方（の神）のお蔭で
　んのつ主の　おかぎん　　命主のお蔭で
七　なかどーず　おかぎん　　中取り〈お嶽の名〉のお蔭で
　おちゃおぬす　おかぎん　　お帳の主のお蔭で
八　のよしがむ　おかぎん　　乗瀬の神のお蔭で
　たすきにーぬの　おかぎん　　助け根の神のお蔭で
九　ぶどずざーぬ　おかぎん　　踊り座〈乗瀬の庭〉のお蔭で
　おばんなの　おかぎん　　大庭のお蔭で
一〇　ぷときざーの　おかぎん　　仏座〈乗瀬にある〉のお蔭で
　おばんなの　おかぎん　　大庭のお蔭で
一一　さうずやーの　おかぎん　　サウズ家のお蔭で
　みもりぬすの　おかぎん　　三盛り主のお蔭で
一二　おぷかにの　おかぎん　　大金〈玉めが神の父〉のお蔭で
　うちょうの　おかぎん　　お帳の主のお蔭で
一三　やすつぬすの　おかぎん　　屋敷主のお蔭で
　ところぬすの　おかぎん　　所主のお蔭で
一四　まざおぬすの　おかぎん　　真門の主のお蔭で
　やごみの　おかぎん　　恐れ多い神のお蔭で
一五　ふつもとの　おかぎん　　口元〈入口〉の神のお蔭で
　まんつの　おかぎん　　真道主のお蔭で
一六　つそぱまの　おかぎん　　白い浜の（神の）お蔭で
　かぎぱまの　おかぎん　　美しい浜のお蔭で
一七　つかさやーの　おかぎん　　漲水神社のお蔭で
　くにぬぬすの　おかぎん　　国の主のお蔭で
一八　ばしぬかむの　おかぎん　　海の途中の神のお蔭で
　やごみの　おかぎん　　恐れ多い神のお蔭で
一九　おずぬ主の　おかぎん　　鱶の主のお蔭で
　やごみの　おかぎん　　恐れ多い神のお蔭で
二〇　ながやまの　おかぎん　　長山お嶽の神のお蔭で
　あおかにの　おかぎん　　青鉄のお蔭で
二一　あだんにゃの　おかぎん　　阿旦屋嶽神のお蔭で
　ぴそぎにーの　おかぎん　　ぴそぎ根のお蔭で
二二　おぐすくの　おかぎん　　御城〈ボンミヤー（番所）〉のお蔭で
　おちゃおぬすの　おかぎん　　御帳の主のお蔭で
二三　みずのかむの　おかぎん　　水の神のお蔭で
　やごみの　おかぎん　　恐れ多い神のお蔭で
二四　とうのかむの　おかぎん　　唐の神のお蔭で
　みるくがむの　おかぎん　　弥勒神のお蔭で
二五　やまとがむの　おかぎん　　大和神のお蔭で
　だんながむの　おかぎん　　旦那神のお蔭で
二六　すまかずの　おかぎん　　島々の神のお蔭で
　くにかずの　おかぎん　　国々の神のお蔭で
二七　ななたきの　おかぎん　　七嶽の神のお蔭で
　ななおまいの　おかぎん　　七〈すべて〉御前のお蔭で
二八　かんかんの　おかぎん　　神神のお蔭で
　ももしずの　おかぎん　　百威霊のお蔭で
B二九　もっばらの　いでりきや　　（肩に）担ぎダコができるまで
　かみばらの　いでりきや　　（頭に）のせダコができるまで
三〇　ばたたりの　いでりきや　　腹垂れが出るまで
　ぷそたりの　いでりきや　　臍垂れがでるまで

二一がんぞうさど　たんで
　どうぞうさお　たんで
二二おぷゆにお　たんで
　んてゆにお　たんで
二三あかおむを　たんで
　ふきゃぎゅよ　たんで
二四おぼむずよ　たんで
　そざによ　たんで
二五ながぶたりを　たんで
　すたぶよだれ　たんで
二六あかまめよ　たんで
　ながざやお　たんで
二七おぷぼーずよ　たんで
　まーぶーずよ　たんで
二八じのゆーゆ　たんで
　むつがゆーゆ　たんで
二九つかだめよ　たんで
　まぐだみよ　たんで
四〇あおばぞーゆ　たんで
　そりぱぞーゆ　たんで
四一いむのゆーゆ　たんで
　いそのゆーゆ　たんで
四二しゅずかずのゆーゆ　たんで
　たてかずぬゆーよ　たんで
四三あみのゆーゆ　たんで
　つうがゆーゆ　たんで
四四にんじゅゆし　たんで
　まびとゆし　たんで
四五おやなずゆー　たんで
　しゅうなずゆー　たんで
四六かぎたびゆ　たんで
　ちゅらたびゆ　たんで

健康をどうぞ
体の強さをどうぞ
大粟の豊作をどうぞ
満ち粟をどうぞ
大芋をどうぞ
（芋の）吹きあがり（芋のこと）をどうぞ
大麦をどうぞ
良い種子をどうぞ
長穂垂れをどうぞ
穂垂れをどうぞ
赤豆をどうぞ
長莢をどうぞ
大甘蔗をどうぞ
真甘蔗をどうぞ
お金の世をどうぞ
品物（穀）の世をどうぞ
枡のいっぱいをどうぞ
マグ（容器）の一杯をどうぞ
青野菜をどうぞ
揃った野菜をどうぞ
海の世をどうぞ
磯の世をどうぞ
種ごとの世をどうぞ
立て数の世をどうぞ
雨の世をどうぞ
露の世をどうぞ
人衆寄せをどうぞ
真人寄せをどうぞ
親成りの世をどうぞ
主成り（立身出世）の世をどうぞ
立派な旅をどうぞ
立派な旅をどうぞ（ください）

そして、大川（一九七四、二一九頁）によると、続けて次の歌をうたったとあり、意訳を付している。次にそれを引用する。

○　プカラッシャキュウダラ、　嬉しさも、喜びも今日の日だ
　イサオサヤ、ンナマダラ、　ろう。さあ神様を敬って願を
　ゾウハイ、ンマター、ヤゴ　通してお祝いしようおばあさ
　ミャナーギー、ニガズザー、　んたち
　アガラシ、ユーズンパイデ、
　アパラギンマタ。

聖地と神名　一を除いて、どの節も同義の言い替えをして、対句形式を採っている。

聖地と神名について、若干補説しておく。七の「中取り（ナカトーズ）」は仲島御嶽のことである。九の「踊り座（ノドスザー）」と一〇の「仏座（ノトヤー）」が「乗瀬の庭」にあるというのは、乗瀬御嶽との関係を重視しすぎた解釈である。「踊り座」はカムシャーにもあれば、安谷屋御嶽にもある。また、仏座はカムシャーにある。一一の「サウズ家（ヤー）」はソージャー（精進屋）すなわち神屋（カンヤー）で、「三盛り主（ミチヌス）」はオコマ座の三つ石（火の神）を意味している。一五の「口元（クチヒト）（入口）の神・真道主（マンシツ）」とは、渡口の浜にある南の口元（ハイヌクチ）（ノムトゥ）の神のことである。二一の「阿旦屋嶽（アダンヤ）」は安谷屋御嶽のことである。二四の「唐の神（トーカム）」が「弥勒神（ミルクガム）」と言い替えられているのは、注目しておきたい。この祭りの主神・唐の神が海彼から島に富をもたらす福神・「弥勒神」だというのである。

調査時のカンナーギアヤグ　筆者が調査したときのカンナーギアヤグ

は、右の神歌と基本的に同じだが、いささかの増減がある。神歌の変容の様態を知るためにも、そのときの神歌を次にあげる。共通語訳は伝承者から聞いたものである。

〈カンナーギアヤグ〉　〈神を崇める歌〉

A．ティンガナス　オカギン　天加那志の　お蔭で
ヤグミューイヌ　オカギン　恐れ多い神の　お蔭で
ユーヤナウレ　世よ直れ
（ユーヤナウレは各節で反復するので、以下省略）

二．トヨムピャーズノ　オカギン　鳴響む比屋地の神の　お蔭で
クニヌヌス　オカギン　国の主の　お蔭で
三．ンマヌパヌ　オカギン　午（南）の方角の神の　お蔭で
ウプユヌスヌ　オカギン　大世主の　お蔭で
四．ネノパザヌ　オカギン　子（北）の方角の神の　お蔭で
ンノツヌシノ　オカギン　命主の　お蔭で
五．ナカドーズノ　オカギン　仲島御嶽の　お蔭で
オチョーヌヌス　オカギン　お帳の主の　お蔭で
六．ヌユシガン　オカギン　乗瀬御嶽の神の　お蔭で
タスキニーヌ　オカギン　助け神の　お蔭で
七．ブドゥイザーヌ　オカギン　踊り座の　お蔭で
オパヌシュガ　オカギン　大庭の主の　お蔭で
八．プトゥキザーヌ　オカギン　仏座の　お蔭で
オパヌシュガ　オカギン　大庭の主の　お蔭で
九．ソーズヤーヌ　オカギン　精進屋（神屋のこと）の　お蔭で
ミモリヌスヌ　オカギン　オコマ座の三つ石の主（火の神）の　お蔭で
一〇．ウプカニノ　オカギン　オブカニ[9]神の　お蔭で
オチョーヌヌス　オカギン　お帳の主の　お蔭で
一一．ヤスツヌスノ　オカギン　屋敷主（神）の　お蔭で
トコロヌスヌ　オカギン　所主の　お蔭で
一二．マザオヌスノ　オカギン　真門の主の　お蔭で
ヤグミューイヌ　オカギン　恐れ多い神の　お蔭で
一三．フツモトノ　オカギン　口元（港）の神の　お蔭で
マンツヌスノ　オカギン　真道主（海路の神）の　お蔭で
一四．シルバマヌ　オカギン　白浜の神の　お蔭で
カギパマノ　オカギン　美しい浜の　お蔭で
一五．ツカサヤーノ　オカギン　漲水御嶽の神の　お蔭で
クニヌヌスヌ　オカギン　国の主の　お蔭で
一六．バシヌカンヌ　オカギン　海の途中の神の　お蔭で
ヤグミューイヌ　オカギン　恐れ多い神の　お蔭で
一七．オズノシュ　オカギン　オズの主（字伊良部の長で、伊良部と平良の間にいた鱶を一命を捨てて退治し、神になった）の　お陰で
ヤグミューイヌ　オカギン　恐れ多い神の　お蔭で
一八．マツバラシュヌ　オカギン　マツバラ主（オズの主の子）のお蔭で
ヤグミューイヌ　オカギン　恐れ多い神の　お蔭で
一九．ナガヤマノ　オカギン　長山御嶽の神の　お蔭で
アオカニノ　オカギン　青金（鍛冶）の神の　お蔭で
二〇．アダンニャノ　オカギン　安谷屋御嶽の神の　お蔭で
プソギニーノ　オカギン　産子神（プソギニは広げる意で、子供を授けること）の　お蔭で
二一．オグスコノ　オカギン　御城（番所）の神の　お蔭で
オチョーノヌスノ　オカギン　お帳の主の　お蔭で

二二ミズノカンノ　オカギン　水の神（井戸の神）の　お蔭で
ヤグミューイノ　オカギン　恐れ多い神の　お蔭で
二三トーノカムヌ　オカギン　唐の神の　お蔭で
ミルクガンノ　オカギン　弥勒神の　お蔭で
二四ヤマトガンノ　オカギン　大和御嶽の神の　お蔭で
ダンナガミノ　オカギン　旦那神の　お蔭で
二五アミリカヌ　オカギン　アメリカの神の　お蔭で
ウプユヌスヌ　オカギン　大世主の　お蔭で
二六シマカズヌ　オカギン　島数（すべての島々の神）の
お蔭で
クニカズヌ　オカギン　国数（すべての国々の神）の
お蔭で
二七ナナタキノ　オカギン　七嶽の神の　お蔭で
ナナオマイノ　オカギン　七御前の神の　お蔭で
二八カンカズ　オカギン　神数（すべての神）の　お蔭で
モモシズノ　オカギン　百神の　お蔭で
B二九ガンゾーサド　タンディティ　頑丈さを　ください
ドーゾーサオ　タンディティ　健康を　ください
三〇ウプユニヨ　タンディティ　大いなる粟の垂穂（穀物）を　ください
ンテユニヨ　タンディティ　満てる粟の垂穂を　ください
三一モツバラノ　イディリキャー　幸を運ぶ肩が　凝るほど
カミバラノ　イディリキャー　幸を運ぶ頭が　凝るほど（幸を
ください）
三二バタタリノ　タンディティ　腹が垂れるほど　食べさせてく
ださい
プソタリノ　タンディティ　臍が垂れるほど　食べさせてく
ださい
三三アカウムオ　タンディティ　赤芋を　ください
フカギヨ　タンディティ　土の盛り上りを　ください
三四ウプムズヨ　タンディティ　大麦を　ください
ソザダニヨ　タンディティ　最初の種（五穀のなかで麦が
最初に播かれる）を　ください
三五ナガプタリオ　タンディティ　（粟の）長い穂を　ください
スタブダリ　タンディティ　下穂垂れを　ください
三六アカマミオ　タンディティ　赤豆を　ください
ナガザヤオ　タンディティ　長莢を　ください
三七ウプボーズヨ　タンディティ　大きい甘蔗を　ください
マーボーズヨ　タンディティ　甘い甘蔗を　ください
三八ジンノユーユ　タンディティ　銭の幸を　ください
モツガユーユ　タンディティ　物持ちの幸を　ください
三九ツガダミヨ　タンディティ　枡にいっぱい　ください
マゴダミヨ　タンディティ　マゴ（容器の一種）にいっぱい
ください
四〇アオバゾーユ　タンディティ　青野菜を　ください
ソリバゾーユ　タンディティ　揃った野菜を　ください
四一インノユーユ　タンディティ　海の幸を　ください
イスノユーユ　タンディティ　磯の幸を　ください
四二アミノユーユ　タンディティ　雨の幸を　ください
ツウガユーユ　タンディティ　露の幸を　ください
四三シュズカズノユーユ　タンディ　すべての幸を　ください
ティ　タテカズノユーユ　タン　数々の幸を　ください
ディティ
四四ニンジュユシュ　タンディティ　人数を寄せて　ください

マビトユシュ　タンディティ　真人寄せ（子供を増やして）
四五オヤナズユー　タンディティ　親になる（出世する）幸を
シューナズユー　タンディティ　主になる幸を　ください
四六カギタビユ　タンディティ　立派な旅をさせて　ください
チュラタビユ　タンディティ　美しい旅をさせて　ください
○　プカラサ　キュダラ　イサオサヤ　喜ばしい　今日だよ　誇らかな
ンナマダラ　ピルナンカ　今だよ　昼七日
アスバディ　ピルヤンカ　神遊びしよう　昼八日
ボドラディ　ゾーハイ　ンマター　踊ろう　全員の　神女たちよ
ヤグミューナーギ　恐れ多い神を崇め
ニガザ　アガラシ　ヨーズンパイ　願いを　通し　お祝いをでか
ディ　アパラギンマタヨ　そう　麗しい神女たちよ

伝承状況　先行の神歌と調査時の神歌を比較してみると、伝承状況は良好だといえるだろう。目につく両者の相違点を見てみよう。(1)調査時の神歌に、先行の神歌の一がない。この先行の神歌の一はⅠ・Ⅱのヤークヨ・・ウルル・・とカンナーギアヤグを接続する節だが、二以下の対句仕立ての構造を持たないので、消滅しやすかったと思われる。(2)調査時の神歌の二五に「アメリカの神」が登場しているが、これには時代の変容を敏感に感受するユタの世界観が関与していよう。

神々の恩寵　細部によくわからない点もあるが、この神歌の構造と主題はおよそとらえられる。この神歌は二段仕立てになっている。Aは来臨している神の名を列挙して賛美し、これらの神々によって今の繁栄があると感謝している。Bはこれらの神々にあらゆる世（幸）をいただきたいと祈願している。すなわち、神々の恩寵によって幸がもたらされているが、さらに幸をいただきたいというのである。この主旨を要約したのが○の部分で、神遊びをして神々を崇め、祈願を神々に聞き届けてもらいたいと述べる。以上の主旨は、司やユーキウマが各御嶽で唱えた祈願の主旨と同じである。

この簡潔な主題をこれほど長大に仕立て上げたのには、理由があるだろう。諸々の祈願を確実に適えてもらうためには、神々を細大漏らさず呼び出し、祈願の数々を具体的に列挙する必要があったのではなかろうか。安谷屋御嶽には主神の唐の神をはじめ諸々の神が参集しているので、まずここでこのカンナーギアヤグを歌い、あらゆる幸をいただきたいと祈願したのである。

神々の羅列　なお、Aの神名の列挙は単純な羅列であり、ここには秩序ある神々の世界は認めがたい。主神の唐の神も、他の神々と同列扱いになっている。

後宴　こうして神遊びを終えた神女たちは、神饌のお下がりを食べ、お握りを交換しあいながら和やかな一時を過ごす。

カータームニ　やがて神女たちは行列を作って神道を通り、カムシャーに向かうが、途中で神遊びをする。

まず、カータームニでⅡとカンナーギアヤグの神遊びをする。カータームニはナカユクイ（中休みの義）とも称される十字路だが、かつては三叉路だったという。大川（一九七四、一二五頁）は、ここで神遊びするのは息抜きのためだという言われを採録しており、筆者も同様のことを聞いている。しかし、息抜きのための神遊びがあるだろうか。これは地名のナカユクイ（中休み、農作業の行き帰りの途中で休むの義）の語義に引かれた解釈だろう。道の交叉点は神霊の集合する所でもあるので、仲島御嶽や安谷屋御嶽に参集しなかった神々を、ここで迎え、神遊びをしていると考えられる。

スム井　次いで、乗瀬（メーン）御嶽の北西にある古井戸（カー）のスム井でⅡの神遊びをする。ここでも神迎えをするのだろう。

神々の道行き　こうして、神女たちは神々を招来してくるが、その道中ひっきりなしにウルル・・という声を発してあたりを払っている。村人はこの声を恐れている。また、村人（とくに男性）はユーキウマの目に触れることも恐れ、一行に会わないようにしている。もしその目にとらえられると必ず不幸に見舞われる、と信じられている。偉大な神の眼光によって卑小な人間の命が絶たれてしまうというのだろう。ただし、格子越しとか、金網越しに見ることは許されている。また、運悪く一行に出くわしたときは、神饌を捧げて謝罪すれば、不運は解消されるという。

折口信夫（一九七六、九頁）は、琉球神道の神幸について次のように述べている。「琉球神道にては、神幸の際、神事に與らぬ人の之に會ふを忌み居り候。若し、神巡遊の道を過りて、神に遭ふ時は、近き内に死ぬるものと信ぜられ居り、嚴に外出を謹み居り候。（中略）琉球にても（中略）尚地方によりては、此を神と言はず、神に扮したる神人の、神幸を例年どほりに執行するものと申し居候地方も、間〻有之候。」『折口信夫全集　第十六巻』（一九七六、後書き）によると、この論考は、琉球および先島列島民間伝承採訪旅行の後、一九二四年（大正一三）に執筆されたと推定されている。それからほぼ六〇年経った一九八〇年代にも、先島の伊良部島に神に扮した神人の神幸がまだ伝承されていたのである。

日没ごろ、神女たちはカムシャーに着いた。以上の神迎えを、カムスオリ（神様降り）という。

神女の座　神屋（カンヤー）に入った神女たちは指定された座につく。司たちは東に座を占める。神屋には東西のオコマ座があるが、このオコマ座を基準にしてユーキウマたちも東西に二分され、これが四日間の神酒と酒を出す割り当ての基準になっている。すなわち、東側に座を占める神女が一一月に提供し、西側に座を占める神女が一二月に提供している。

オコマ願い　七時ごろから九時ごろまで、オコマ願いが神屋で執り行われる。なんらかの願いを持つ村人は、一族のユーキウマと司に鍋小煮（スンガーニー）と酒と線香を捧げる。鍋小煮とは、大根・昆布・豆腐・魚などの煮付けを鍋に入れたまま捧げる神饌である。神女たちはこれらの神饌をオコマ座に供えて祈る。

夜の歌舞　神女たちは、神屋のなかで司、アヤグダツ、ユーキウマの順に歌舞を奏して神々を慰める。最初は祝福を主題とする御前風（ゴンジョー）だという。これは最後の夜まで続けられる。

4　二日目

朝踊り　早朝、神女の家族が神屋（カンヤー）に朝食（マサブン）とカウス・テブサ・イツスクブを届ける。神女の食事に油を用いることは禁じられている。

八時ごろ、司は、オコマ座、仏座（ブツザ）の順に茶湯をあげ、線香を焚いて祈る。

それから、司とユーキウマは、神の羽織り（神衣裳）をつけて村から出す神饌（前述した一式）を踊り座（アドスザ）に供え、線香を焚いて祈る。次いで、神女たちは、カウスを被り、イツスクブを腰に巻き、テブサを持って、踊り座の前で円陣を組み、Ⅰ、Ⅱ、カンナーギアヤグの神遊びをする。以上の神遊びを朝踊（アドスンドル）りといい、毎朝、執り行われる。

お役座　引き続き、お役座（ウイカザ）（ウイカブンとも）が踊り座で執り行われる。その語義は立身出世の祈願のことである。この儀礼の願い主は生徒・職人・会社員・公務員などである。願いのある家の女性が参列し、おびただしい神饌を供える。他所へ出ている者でも実家から神饌が供えられる。ユーキウマと司が司祭者になって祈願する。山のような線香が白砂の上で焚かれ、村人の信仰心の篤さがよくわかる。

名主　午後から名主（ナーヌス）が仏座（ブツザ）で執り行われる。これは乗瀬御嶽（イーンウタキ）の女神・

タマメガとその父神オプカニの名前を童名にもらった人たちの繁栄祈願と感謝の儀礼である。

『伊良部村史』（一九七八、一三五四頁）によると、童名のつけ方は、赤子の生まれた日の干支にあわせて吉日を選び、赤子の性別によって、天加那志、オコマ神（火の神）、村人の信仰している神、父方や母方の先祖の神のなかから籤で選んで命名している。

タマメガとオプカニを童名とする者の家族（女性）が神饌を仏座に供え、乗瀬御嶽の司のみが司祭者になって乗瀬御嶽のイビの方に向けて祈る。ユーキウマも他の二人の司も、この儀礼にはかかわっていない。

踊り座と仏座　踊り座と仏座の区別は、尋ねてもよくわからない。しかし、これを知る手掛かりがないわけではない。安谷屋御嶽の踊り座ではユーキウマが司とともに拝んで神遊びをし、仲鳥御嶽では司だけが司祭していた。また、カムシャーおける朝の拝みでは踊り座に格別な神饌が供えられ、ここではユーキウマが司とともに拝んで神遊びをし、仏座では司だけが拝んでいる。そして、お役座は踊り座でユーキウマが司とともに司祭し、名主は仏座で乗瀬御嶽の司のみが司祭している。

これら司祭者の相違と重複からみて、踊り座と仏座の区別は祭神の相違にあると考えられる。すなわち、ユーキウマと司の司祭する安谷屋御嶽とカムシャーの踊り座には来訪神・唐の神が鎮座しており、司だけが司祭する仏座には乗瀬御嶽の神をはじめとする諸々の神（唐の神以外）が鎮座していると考えられる。とくにカムシャーの仏座における名主を乗瀬御嶽の司のみが司祭するのは、仏座に鎮座する乗瀬御嶽の神にのみ祈願するものだからである。

なおこうしてみると、司だけが司祭する仲鳥御嶽にも、唐の神以外の神々が鎮座していると考えられる。

唐の神は、三日目の夜中御願のとき船に乗って唐に帰るという。その時に歌う神歌「フナウサギ」によると、ユーキウマはその唐の神を唐に送り届ける船子神にもなっている。それでユーキウマを別に四〇の船子のオバーともいうのである。ユーキウマは弥勒神である唐の神に仕えるお供・御杖代であり、唐の神に世（幸）を乞う神女なのである。このユーキウマに対して、司は唐の神とその他の神々にも仕える神女なのである。

唐の神は最も偉大な神なのでこの神の鎮座する踊り座に格別な神饌が供えられ、ユーキウマが中心になって拝み、神女全員が神遊びすることになる。出世祈願のお役座はより大きい唐の神に祈るので、祈願はこの神の鎮まる踊り座でなされ、ユーキウマが中心になって司とともにその願いを唐の神に届け、世（幸）を乞い受けるのである。これに対して、この日の名主は島の乗瀬御嶽の女神とその父神にかかわることなので、唐の神以外の神々の鎮まる仏座で乗瀬御嶽の司のみが司祭し、ユーキウマも他の司も関与しないのである。

しかし、なぜ仏座で乗瀬御嶽にかかわる名主だけが執り行われるのだろうか。島の御嶽の神名を童名にしている者のすべてが、この名主で祝福してもらっていいはずである。

この点、三日目の午前に三人の司の司祭のもとで仏座でも祈りがなされているので、これが他の神名を童名にした者の名主に相当するかと考えられる（後述）。しかしそれにしても、このように二日目に乗瀬御嶽にかかわる名主だけが特別に執り行われるのには、いささか事情があるだろう。これには、乗瀬御嶽とのつながりを説くカムスの由来譚（一）が大きくかかわっているようである（後述）。

解き座　仏座の名義について、平敷（一九九〇、二六四頁）は「プトゥキ座は、年初のナーヌスに対する立願をカムウリの時に解くことにちなむ名称と思われる。プトゥキは「解き」であろう」と説く。この解

釈は正鵠を射ているだろう。

『伊良部村史』（一九七八、一二八七頁）は、年頭の名主について次のように記している。元旦の午前中に「シュウコウ（ソウカウ）がある。これは焼香して、神（マウカン　先祖神とナーヌス　神名を頂いた故人または神）を崇めることである。分家の者は本家へ、妻は夫方の家へ、名をいただいた人の家は、その故人の生家へとシュウコウに行き、トクヌカン（宅地の神）、ヤーヌカン（家のための神）、ナーヌス等にご馳走を供えて拝み終って正月を共にする」。わかりにくい文だが、自分の童名をいただいた「神」（故人や神）に縁のあるところに行き、線香を焚き、神饌を供えて自らの繁栄を祈願したというのである。この立願の解き願が、年末のカムスのプトゥキ（解き）座でなされたのである。

ただし、現行の実際の儀礼は神名を童名にする者の繁栄祈願と感謝を主題にしている。

魚献上　この二日目から四日目まで、伊良部の海人（漁師）たちは捕ったばかりの魚を供物として奉る。魚はシヂューナレの手で神屋に運ばれ、オコマ座に飾られる。それからシヂューナレが調理して神女たちに食べてもらう。この魚献上は大漁を祈願してのことである。

夕踊り　夕方、神女たちは夕踊りをする。その次第は朝踊りと同じである。

やがて夕食を家族が運んでくる。

感謝の儀礼　この一年間に神女やその親族に慶事（年祝い・新築・結婚・誕生など）があった場合、慶事のあった者がこの二日目か四日目の夜に鍋小煮と酒を神屋のオコマ座に供える。これは祈願を適えてくれたことへの感謝の儀礼である。

夜の歌舞　一日目と同じである。

5　三日目

ナハヌトゥカ　三日目をナハヌトゥカともンナカともいう。これは中の日の義である。

朝踊り　二日目と同様、神饌を供えて朝踊りをする。

個々の祈願　午前中はとくに祈願のある者が神女たちに祈ってもらう。願い主の願い次第でオコマ座、踊り座あるいは仏座に供物を供えて祈願する。

このうち仏座での祈願は名主とは称していないが、実質は名主と同じだと考えられる。この仏座での司祭者は三人の司である。すなわち、乗瀬御嶽以外の神の神名を童名としている者の繁栄祈願と感謝の儀礼だと考えられる。

家の繁栄祈願の神饌作り　各家のオバー（主婦）たちは午前中、元に米・芋・大根・小豆・神酒などを持って集まる。そして、この日の午後に執り行われる家の繁栄祈願に供える神饌を作る。ここで作る神饌は、⑴唐芋に小豆を混ぜたお握り、⑵ご飯に小豆を混ぜたマミソイのお握り、⑶大根の葉の味噌和え、⑷煮た芋である。

夜籠もりをしない神役（皿のウマ・帳の主・皿の主）も、心次第に神饌を出す。

村から出す神饌として、いつもの一式をシヂューナレが準備する。

乗瀬御嶽での家の繁栄祈願　午後、家の繁栄祈願が乗瀬御嶽で執り行われる。拝殿に司とユーキウマ、オバーが何列かに横列する。最前列には司、その後ろに皿のウマとアヤグダツ、その後ろにユーキウマ、そして最後に願い主のオバーが列座する。まず、司が祈願し、全員が礼拝する。次いで、一日目の要領でみんなでカンナーギアヤグを歌う。それから、神饌のおドがりを食べる。

サラパヤシ　最後に、拝殿に横列して「サラパヤシ」を歌う。サラパ

ヤシは皿囃しの義である。皿とは神酒を盛る角皿のことである。この神歌の管理者は皿のウマで、皿のウマを別にアヤグダツ（綾言立ち）ともいう。この神歌の歌い方は、皿のウマが一節ずつ歌い、これを他のみんなが復唱する。みんなが両手を前に差し出し、掌を上に向けて優しく上下させながらリズミカルに歌う。メロディーから受ける印象は、きわめて軽やかな調子である。

この神歌は三段に分けて歌われる。一段を歌うとき、司三名とユーキウマのアヤグダツ一人（計四名）が角皿を捧げ、歌い終わると神酒をフサパネでかき混ぜて飲む。次に二段を歌うとき、ユーキウマ四名（このなかにもう一人のアヤグダツが入る）が同じ所作をし、三段を歌うときも、別のユーキウマ四名が同じ所作をする。

筆者が調査したおりの「サラパヤシ」は、次のとおりである。共通語訳は伝承者から聞いたものである。A・Bの段落区分は意味上から筆者が付した。

〈サラパヤシ〉　〈皿囃し〉

ピティヨーティ　一段

A一　ティンガナス　ウイガナス　天加那志　上加那志の
オカギンヨー　お蔭よ
二　トヨムピャーズ　オブユヌス　鳴響（トヨ）む比屋地の　大世の主の
オカギンヨー　お蔭よ
三　ンマヌパヌ　ンティユヌス　午（南）の方の神　溢れる世の主
オカギンヨー　の　お蔭よ
ウヤギユマサリヤガ　富貴の世（幸）が勝り
ウヤギユナウリヤガ〈囃子〉　富貴の世が直り
（囃子は二段と三段の後で反復するので、以下省略）

フタヨーティ　二段

四　ニヌパザーヌ　ウパルズガ　子（北）の方の神　ウパルズ御嶽
オカギンヨー　（仲地にある）の神の　お蔭よ
五　ナカドーズノ　バカガンヌ　仲島御嶽の　若い神の
オカギンヨー　お蔭よ
六　ヌヨシガン　タスキガン　乗瀬御嶽の神　助け神の
オカギンヨー　お蔭よ

ミジョーティ　三段

七　ナナタキガ　ナナオマイノ　七御嶽（すべての御嶽）の　七御
オカギンヨー　前〈神〉の　お蔭よ
B八　キューニガイ　キューウサギ　今日のお願い　今日の供物の
ブンナヨー　盆だよ
九　ガンズーサウ　ドゥユズーサウ　頑丈さを　健康を
タンディティ　ください
一〇ウプユニヨ　ンティユニヨ　たくさんの幸を　ありあまる幸
タンディティ　を　ください
一一カミバラヌ　ムツバラヌ　幸を運ぶ頭が　幸を運ぶ肩が
イディリキャー　凝るほど（幸をください）
一二ウヤナウズ　シュヤナウズ　親（人の上に立つ者）に　主に
タンディティ　させてください
一三タティウガン　ムツウガン　立て御願（九～一二を指す）
ムチュウトゥイ　持つ御願を　しているから
一四タスキブン　ムチャギブン　助けてもらう分　持ち上げてい
ウイユドゥ　る分を　みな適えてください
一五ツツヤツツ　クガニビューリ　戊巳の　黄金日（吉日）を
ユーイラビ　よく選んで
一六ンマバラガ　クラバラガ　親腹（伊良部）　子腹（仲地）の
ウイカラ　すべてから
一七キナイカヅ　ヤーキカヅ　家庭の数　家々の数の

ウイカラ　すべてから
一八ナミバイガ　ユシバイガ　人々　人々の
ウイカラ　すべてから
一九マゴドゥリヤズ　ツガドゥリヤズ　マゴで集め　枡で集め
二〇モモボンナ　センボンナ　百の盆　千の盆を
コノミーヨ　作って
二一バガスザキ　ザウナギナ　バガス（素焼きの銚子）の酒
ウサギヨ　銚子酒みんなを　捧げて
二二ムリザカナ　ブンナギナ　盛り肴を　盆みんなを　捧げて
ウサギヨ
二三ツブンサク　ツブコノミ　壺の酒（神酒）　壺の神酒を作り
コノミヨ　作って
二四ウプザラヤ　トゥユツキャヤ　大皿（角皿）　神の前に届く皿を
ユーイダセー　よく出して
二五ウプザラン　アーヤムラシ　大皿に　溢れるほど盛りつけて
ウサギヨ　捧げて
二六トゥユツキャン　ユーヤムラ　願いが神の前まで届く皿に　世
シ　ウサギヨ　（幸）を溢れるほど　盛って捧げ
て
二七ティンノモモ　スタノモモ　天の百　下（地）の百の
チョーウガミ　帳の主を拝む
二八トゥユツカシ　イツツカシ　聞き届けて　聞き届けて
フィーサマチ　ください
二九トゥユツツノ　イツツツノ　お聞き届けの　お聞き届けの
オニガイ　お願い
三〇ニガイカギ　ウサギカギ　願いはきれいに（神の前に届く）
ユワイヨ　崇めはきれいに　そのお祝いよ
三一ユワイシドゥ　ホコリヤガリ　お祝いして　誇りに思って
ウサギー　差し上げた

三段仕立ての演出　この神歌の構造と主題は、詞章だけをみると基本的にカンナーギアヤグと同じで、二段仕立てである。すなわち、Aは神々を列挙して賛美し、神々の恩寵に感謝し、Bはこれらの神々に神饌を捧げるので諸々の祈願を適えてくださいと述べている。祭日を祝福し、伊良部・仲地の各家々から供出したたくさんの神酒や肴を捧げるので、健康・出世などのあらゆる願いを聞き届けてくださいというのである。

しかし、実際の演出は三段仕立てである。神事芸能として演じるときの構造は、必ずしも詞章上の構造と一致していないのである。

それでは、この三段仕立てに要請されるものは何だろうか。それは、高級神女がそれぞれの責任のもとで神酒を捧げて祈願を聞き届けてもらうところにあると考えられる。一段ごとの囃子詞は演出上のとじめであって、この神歌の主旨（富貴の世になること）を最もよく示している。

『伊良部郷土誌』のサラパヤシ　『伊良部郷土誌』にサラパヤシが採録されている。その本文は大川（一九七四、一二〇～一二二頁）にあり、外間・新里（一九七八、一一六・一一七頁）がこれに共通語訳を付している。この本文は皿の主（男性）が歌うサラパヤシである。皿のウマ（女性）が歌うカムスのサラパヤシと比較してみると、本文はほぼ同じだが、(1)神饌として大麦が登場し、(2)用語が若干異なるという相違がある。

また、大川（一九七四、一二五頁）は、三日目の日中は二日目と同じような行事をするとだけ記している。すなわち、お役座と名主だけを執り行い、皿のウマが歌うサラパヤシの儀礼がないというのである。

これは大川の調査漏れかと考えられる。

なぜ乗瀬御嶽なのか　以上の家の繁栄祈願が、乗瀬御嶽で執り行われているのは、なぜだろうか。これらの神歌は諸々の神に祈願することを主題にしており、とくに乗瀬御嶽の神を重視しているわけでもない。この祈願の神歌・サラパヤシは、あらゆる神の集結するカムシャーで歌われてこそ、聞き届けられるのではなかろうか。

このようにカムスにおいて乗瀬御嶽の存在が大きく浮き出てくる事情は、儀礼や神歌の面からは容易に説明できない。家の繁栄祈願の儀礼が乗瀬御嶽を祭場とする背景には、乗瀬御嶽とのかかわりを力説するカムスの由来譚（一）があると考えられる（後述）。

大漁の模擬演技　乗瀬御嶽でのサラパヤシの儀礼が終わる夕方、神女たちもオバーたちも渡口の浜に向かう。司は浜に下り、南の口元に神饌を供え、線香を焚いて大漁を祈願する。やがて数名のオバーが海人に扮して浅瀬に入り、魚捕りの真似をする。ユーナやガヂュマルの葉を海面に浮かべて魚に見立て、カッツァーやハマハタなどの蔓草を網に見立てて、追い込み漁の模擬演技をする。神女をはじめとする参列者は、次にあげる「魚取り踊り」を歌う。

それからカムシャーに入り、ここでも円陣を作って同じ歌をうたい踊る。

なお、大川（一九七四、一二六頁）は、五日目にこの大漁祈願の儀礼を行ったと記している。大漁祈願の儀礼は流動性が強く、諸儀礼の合間に執り行ってもいいようである。

魚取り踊り　次に、この「魚取り踊り」の歌詞をあげる。

〈イズトゥブドゥリ〉　〈魚取り踊り〉

一　ティンガナス　ウカギン　天加那志の　お蔭で
　　ヤゴミノ　ウカギン　恐れ多い神の　お蔭で
　　ソリ　カーミヤ　ヤイマヌシュ　ソリ　カーミヤ（不詳）　八重山の主よ　四島の主よ
　　ヨスマヌシュ
　　（ソリ以下は囃子詞で各節で反復するので、以下省略）
二　ヤイマシュヤ　インクナ　八重山の主は　魚取り　心持ち
　　マーナイシュヤ　サウトゥリャー　のよい人は　釣竿取り（持ち）
三　イーンヌユーユ　タンディ　海の幸を　ください
　　イースヌユーユ　ユシュトゥーイ　磯の幸を　寄せてください
四　インングナードゥ　ヤイバユ　魚取りで　あるから
　　サウトゥリャドゥ　ヤイバユ　釣竿取り（持ち）で　あるから
五　ナマダマン　ユヌタマ　生の分け前　幸の分け前
　　ヤツダマン　ユヌタマ　焼いた分け前　幸の分け前（海の幸をみんなで平等に分けあっての意）
六　トヨムピャーズ　ウカギン　鳴響み比屋地御嶽の　お蔭で
　　クニヌヌス　ウカギン　国の主の　お蔭で
七　ノヨシガン　ウカギン　乗瀬御嶽の神の　お蔭で
　　タスキガン　ウカギン　助け神の　お蔭で
八　ウプユニヨー　タンディ　大いなる粟の垂れ穂（穀物）を
　　ンティヨーヨ　ユシュトゥーイ　ください　満てる粟の垂れ穂を寄せてください

大漁祈願　各節は同義の句を連ねる対句仕立てになっている。神の徳を称え、海の幸をたくさんくださいと祈願している点は、カンナーギアヤグやサラパヤシと共通している。このように漁労儀礼をして、三日間鮮魚を供え続けた海人のために大漁祈願をする。

なお、八は粟の豊作を祈願しており、題名の魚取り踊りの範疇から逸脱している。大漁祈願の心情が溢れだし、思わず豊作祈願にまで至ったものだろう。

カンナーギアヤグのクイーチャー　伊良部・仲地のオバーたちの捧げた神饌は、神屋のオコマ座にも飾られている。司の祈りの後、これが

神女たちやオバーたちに配られ、後宴が始まる。

この宴の最後に、円陣を組んで全員でクイーチャーを歌い踊る。神女たちも神の羽織り（神衣裳）を脱いで参加する。踊る場所はカムシャーの前の道路である。この歌舞のアヤグダツは司が務める。歌詞はカンナーギアヤグだが、若干変えて歌う。その変わり方をみるために、一番を例にあげる。

一　ティンガナス　ヤグミューイヌ　ウカギン　ヤイヤノサッサ
　イヌヨイサッサイ　ササハイハイ　（ヤイヤノ以下は囃子詞）

変化した部分は、(1)オカギンが一つ省かれたこと、(2)反復部のユーナウレがヤイヤノ以下の囃子詞になったことである。とても軽やかなリズムで、喜びのあまり何度も歓声があがる。このクイーチャーはかなり娯楽性が強いものである。

夕踊り　やがて夕踊りをする。

夜中御願　潮騒のとどろく深夜（〇時ごろ）、主神の唐の神を送り出す「夜中御願」が執り行われる。これは見ることが禁じられている秘儀である。

南風　唐の神が帰る時には必ず南風が吹くという。確かに夜中御願の儀礼を調査した時も、南風が吹いた。

フナウサギ　神の羽織り（神衣裳）をつけたユーキウマ（船子のオバー）と司は、カムシャーの前の道に出、司・アヤグダツ・船子のオバーの順に海の方を向いて立ち、「フナウサギ」を歌う。フナウサギとは船崇めの義である。いつものようにアヤグダツが一節ずつ歌い、他のみんなが復唱する。

なお、大川（一九七四、二二九頁）は、フナウサギが踊り座で歌われたと記すが、唐の神が鎮座する踊り座から神送りする演出があってもおかしくない。

この神歌は唐の神の乗る船が無事に目的地に着くように祈るものだという。

次に、その歌詞をあげる。本文は大川（一九七四、二二九・二三〇頁）により、これに共通語訳を付した外間・新里（一九七八、三三四・三三五頁）から引用する。

乗瀬お嶽の祭り歌（二）（伊良部島）

一　いらうから　なかつから　伊良部から仲地からとおっしゃるから
　てー　あさまいば　世は直れ〈囃子〉
　ゆーやなおれ（繰返し）
二　やらびやそん　あてにゃそん　子供達さえも幼子さえものこらず
　のこさだ　ゆーなおれ
三　まずのあら　こみのあらのず　米の籾米の籾も残さず選ぶように
　いらびにゃーん　ゆーやなおれ
四　いらびゅり　つそりゅーず　選んでいる集まっている
　ふなこの　つそりゅーず　舟子が集まっている
五　おやつ主が　みやこなずの　大役主の宮古の主成りの
　たびてーど　みやこなずの　旅といって宮古主成りの
六　やらうだい　さすがものよ　柔ら御台佐司の物を
　とりゃもちー　さすがものよ　取り持って佐司の物を
七　ぬゆしばま　ぱまがい　乗瀬浜　浜に
　おいんな　ぱまがい　下りの浜に
八　かぎたびの　ちゅらたびの　立派な旅の立派な旅のものを
　にがいおず　ちゅらたびの　願っている立派な旅の
九　おぷとがみ　となかがみ　大渡まで渡中まで
　とむそで　となかがみ　お供しよう渡中まで
一〇　あおなずの　ながむぬの　青大将の長いものが
　ぴずにーん　ながむぬの　走るように長いものが
一一　どむでゃしー　どがいしー　〈未詳〉

ぴりにゃーよ　どがいしー　〈未詳〉
二やすつだみ　ところだみ　屋敷鎮め所鎮めで
ともそでよ　ところだみ　お供しよう所鎮め
三あおずもち　てさじもち　扇を持って手拭をもって
まぬきゃーゆ　てさじもち　招いて手拭をもって
四ななたきの　ななおまいの　七嶽の七御前の
おかぎ　お蔭で
五かんかんの　ももしずの　おかぎ　神々の百威霊のお蔭で
六てんのももちょう　天の百帳
すものももちょうの　おかぎ　下の百帳のお蔭で
七いつつかしー　とうずかしー　行き着かし鳴響着かして
ふいさまち　ください
八いつつー　とうつつの　行き着くところの鳴響着くとこ
おにがい　なおれ　ろの　お願い　直れ

調査時のフナウサギ　筆者が調査したおりの神歌は、次のとおりである。共通語訳は伝承者から聞いたものである。

〈フナウサギ〉　〈船祭め〉

一　イラウカラ　ナカツカラ　伊良部から　仲地から
シュマイバティ　ユーヤナウレ　選んだ船子　世や直れ
（ユーヤナウレは各節で反復するので、以下省略）
二　ヤラビヤソン　アテニヤソン　童（子供）たちを　童たちを
ノコサダティ　残さないで
三　マズノアラ　コミノアラ　米の入った籾を　米の入った籾
イラビニヤーン　を　選んで（実の入った籾を立派な人物に譬えている）
四　イラバリョー　ツソリャリヨー　選ばれた　揺られた（籤で選ばれたこと）　船子が
ズ　フナコノ　五　ウヤズシュ　ミャクナスズヌ　大役主　宮古の主が　泊（渡口の港）へ
トゥマリ　手箱を　立派なものを
六　ヤラウダイ　サスガモノヨ　取り持ち
トリャモチ　乗瀬浜（渡口の浜）で　乗瀬浜
七　ヌユシバマ　パマガイ　で　見送りする
オインナ　安全な旅の　美しい旅の
八　カギタビス　チュラダビヌ　願いだ
ニガイソ　大渡（遠い海）まで　渡中まで
九　ウプトガミ　トナカガミ　お伴する
オトモソディ　青大将が　長物が　走って行く
一〇アオナズヌ　ナガムヌヌ　（何の障害もなく渡海する）
ピャズナンティ　揺れながら　揺れながら
一一ドゥムデシャー　ドゥガイシャー　走って行く
ピャズナンティ　（唐の神の）屋敷まで　居所まで
一二ヤスツガミ　トコロガミ　お伴する
オトモソディ　扇を持って　手拭いを持って
一三アオズモチ　テサヂモチ　招いて（見送りして）
マヌキョーラ　七御嶽（島のすべての神々）の
一四ナナタキス　ナナウマイ　七御前の　お蔭で
ウカギン　神数（あらゆる神々）の　百の神
一五カンガズヌ　モモシズヌ　々の　お蔭で
ウカギン　天（天上）の神の帳の主の　下
一六ティンヌモモチョー　スタヌモ　（地上）の神の帳の主の　お蔭で
モチョー　ウカギン　どこまでもお通しを　どこまで
一七イツツカシ　トヨツカシ　もお通しを　させてください
フサミチティ　聞き届けてくださる　聞き届け
一八トヨツツヌ　イツツツヌ

オネガイ　てくださる　お願いだ
一九ウサギカギ　ネガイカギ　崇めた歌を　願った歌を　神に
ウサギティ　捧げる

伝承状況　先行の神歌と調査時の神歌を比較してみると、伝承状況は良好だといえるだろう。(1)先行の神歌の四句目が二句目の反復になっていた四以下の囃子詞が、調査時の神歌ではすべてユーヤナウレになり、(2)調査時の神歌の最後に一九が追加された程度である。

渡海安全　初句と二句がほぼ同義の対句になっている。よくわからない語もあるが、先行の神歌と調査時の神歌を比較してみると、おおよその文脈は辿れる。

この神歌の主旨は、次のとおりである。伊良部と仲地から立派な船子が神の籤で選ばれ、渡口の浜から船出する。彼らは大渡(ウブト)まで、唐(トー)の神の屋敷までお供する。ぜひとも安全な渡海にしたいので、諸々の神は渡海安全の祈願をお聞き届けください。

唐の神が帰る時に南風が吹くというのは、唐の所在を北とみているためだろうが、渡海安全の祈願が適って南風に変わり海が凪ぐことをも意味していよう。フナウサギ(船崇め)の船とは唐の神が乗るいわゆる神の船であり、その渡海安全を呪祷したのがこの神歌である。

なお、神女たちが渡海安全を祈願する神々は、島の御嶽の神々(一四)、あらゆる神々(一五)、天上と地上の神々(一六)だといい、とくに乗瀬御嶽の神をあげないことに注意しておきたい。すなわち、乗瀬御嶽の神が特段に渡海安全の神威を持つとはいっていないのである。

唐の神の原像　送られる主神・唐(トー)の神が神歌のなかに出てこないが、船子が九で大渡(ウブト)・渡中(トナカ)までお供するというので、この大渡(ウブト)、渡中(トナカ)が唐(トー)の神の居所のようである。すなわち、九は唐＝トーの神の原郷が渡＝トであることを示唆していよう。伊良部・仲地では海彼の神の国は唐の国に固定しているが、こうしてみると唐(トー)の神の原像は「渡(ト)の神」だったようである。

船子と船子のオバー　さて、フナウサギの四で船子がこの唐の神を神の国に送り届けると述べるが、その船子とは誰だろうか。それは四〇(コス)の船子のオバー(ユーキウマ)以外に考えられない。船子のオバーが神の籤で選ばれているのも、この神歌と一致している。唐の神は渡口の浜から出航するが、船子のオバーが海を向いてフナウサギを歌うのもこのためである。船子のオバーは信仰上の幻想では神の船を操る船子神という伴神なのである。しかし、この船子神で神歌のすべてが説けるわけではない。渡海安全を期して見送り(七・八・一二)、また一四以下にみられる神々への祈願は、神人の役目であって、今の場合、船子のオバー(神女)こそこの役にふさわしい。

この神歌には、信仰上の幻想である若々しい船子神の像と、祈願を専らとする現実の神女(船子のオバー)の像が混在している。船子神の像がかなり鮮明に浮かび上がるのは、一～六そして九～一二である。これらによると、伊良部・仲地の若者のなかから立派な船子を選び、渡口の浜から出航して大渡(ウブト)(遠い海)までなんの支障もなく渡海し、唐の神の居所まで送り届ける、と述べている。これに対して、七・八・一三以下には現実の神女(船子のオバー)の像が出ている。旅立つ神を見送り、島の神々や天地の神々に渡海安全を祈願するのは、神女(船子のオバー)の務めである。神女の祈りも高じれば自らが船子になる。現実の世界と幻視の世界は、紙一重である。

大川(一九七四、二九頁)は、フナウサギが沖縄へ年貢を納めに行く前の祈願の歌ではないかと推測しているが、これはカムスの由来譚(一)に引かれた説である(後述)。

その他の神遊び　こうして、主神を送り出してから、円陣を組み、手拍子でⅡを歌いながら七回まわる。

次いで、神屋(カムヂヤー)の入り口で円陣を組み、カンナーギアヤグを歌う。そ

して最後に、海の方を向いて数列に並び、カンナーギアヤグを少し調子を変えて歌う。こうして重ねて神々の徳を称え、その恩寵に与かろうとしている。

以上、夜中御願（コナハツガン）は一時間ほどで終わる。

早立ちする主神　五日間の祭りなのに、三日目の深夜に主神の唐の神が帰っている。それは神の国が遠くにあるので、主だった用が済み次第に早立ちするからだという。後述するように、四日目の次第は二日目の次第とまったく同じであり、五日目は打ち上げの日で祈願がない。このようにカムスの主だった次第は三日目までほぼ終わっているので、唐の神が長居しなければならない理由はないのである。

6　四日目

四日目の次第は、二日目と同じである。二日目に参列できなかった村人のために、この日が設けられているという。

7　五日目

マンサン　この日で祭りが終わるので、この日をマンサン（満散）という。

シヂューナレの参集　シヂューナレ（男性）がカムシャーに参集する。今まで実際の務めはその家族の女性がしてきたが、この日ばかりは本人が務める。彼らはカムシャーの末席である出入り口に筵を敷いて座っている。伊良部のシヂューナレは上座の東側に、仲地のシヂューナレは下座の西側に、それぞれ座を占めている。

朝踊り　司は前日と同様、オコマ座と仏座（ブトゥザ）に茶湯を供える。それから、前日と同様、神饌を供えて朝踊（ムトゥヤ）りをする。

なお、大川（一九七四、一二六頁）によると、この後に漁労儀礼が渡口の浜で執り行われたという。

マンサンの拝み　踊り座（ムトゥヤ）に特別な神饌（豆ソイのお握りと野菜の煮付け）を供え、線香を焚いて拝む。次いで、その神饌のお下りを神女とシヂューナレに配り、共食する。座は達成感と解放感で満ちあふれ、踊りだす神女もいる。

シヂューナレの出迎え　やがて神女たちは神の羽織り（神衣裳）を脱いで神域を出る。シヂューナレは自分たちのために祈願してくれた神女を正座して出迎え、神女は彼らの働きをねぎらう。この後、神域の清掃がシヂューナレの手で行われ、司によってカムシャーの出入り口が閉ざされる。

カムスノーリ　神女たちを先にして村落に帰るが、村落の入り口の三叉路でカンナーギアヤグのクイーチャーを踊る。

それから村落の中のカーイ（井戸）に向かう。伊良部と仲地のオバーたちが歌い踊りながら神女たち一行を出迎える。神女たちも歌いかつ踊りながら歩を進める。次いで、ユーキウマたちはカーイを拝み、やがて円陣を組んでカンナーギアヤグを歌い踊る。

以上、こうして祭りを終えて神女たちが村に帰ることを、カムスノーリという。これは、唐の神以外の神々がそれぞれの居所に帰ることを指すと考えられる。カムスノーリ（神様上り、神様直り）は、一日目のカムスオリ（神様降り）と呼応する称である。

一九八七年の次第と神歌　平敷（一九九〇、三五三～三七九頁）は、一九八七年のカムスの報告と考察だが、このときの祭りの次第と神歌の状況は、筆者の調査時のあり方とほとんど同じである。

三　一二月のカムス

前述したように、一二月にもカムスを執り行っている。一二月のカムスの次第は一一月のカムスの次第とほとんど同じだが、次のような若干の相違がある。

一日目　祭りの期間中の神酒と酒（泡盛）を出すのは、一一月は神屋（カンヤー）の東側に座を占めるユーキウマ、一二月は西側に座を占めるユーキウマである。薪や諸道具は一一月に伊良部が提供し、一二月に仲地が提供する。鍋小煮（ナベガイニー）はシヂューナレだけが出す。

二日目　二日目から四日目まで海人が鮮魚を献上するが、一一月は伊良部の海人、一二月は仲地の海人が献上する。

三日目　村のオバーたちによる家（ヤー）の繁栄祈願がない。したがって、サラパヤシの儀礼もない。大漁祈願の儀礼もない。

四日目　二日目と同じである。

五日目　カーイでの出迎えが盛大である。これでカムスのすべてが終わるので、村のオバーたちは元（ムトゥ）で作った神饌をカーイに供え、みんなに配って神女たちを慰労する。そして、最後に全員でカンナーギアヤグを歌い踊る。

以上のように、一一月と一二月のカムスにおける伊良部と仲地の役割分担や神女たちの神饌の分担が、きっちりと定められている。

一一月と一二月の大祭　このように、一一月と一二月にほぼ同じ形式でカムスを執り行っている。なぜ二か月続けて同じ性格の祭りを反復するのだろうか。平敷（一九九〇、二七八頁）は、ほとんど同じカムスをなぜ次の月にも反復するのか、村人も疑問に思っていると記している。確かに、同じ主題のもとに遥かかなたの神の国（唐）から主神（唐の神）を二月続けて島に迎え、その他の神々にもお仕えして四泊五日のお籠りをするのは、たいへんな二度手間であり、村人にしても神女にしても負担が過重である。ある村人は、都合があって一一月のカムスに参列できなかった村人のために一二月のカムスを設定していると説く。しかし、二日目に来られなかった村人のために四日目を設けるほどに、日程には十分余裕をもたせている。これ以上の配慮がはたして必要だろうか。

ほとんど同じカムスをなぜ次の月にも反復するのかという疑問は、このシマ（伊良部・仲地）の事例からだけでは解けないだろう。

四　由来譚の形成

儀礼と歌謡と由来譚　以上、儀礼の次第と歌謡（主に神歌）をみてきた。

その結果、カムスはカムシャーを主たる祭場とし、唐の神を主神とした諸々の神にあらゆる世果報（ユカフー）を祈願し、感謝する祭りだとわかる。

しかし、儀礼をよくみると、この祭りの主旨と直接かかわらないはずの乗瀬御嶽がかなり関与していた。それは次の三点である。(1)乗瀬御嶽にかかわる神名を童名にする者の名主（ナーンス）が二日目にとくに設けられ、(2)二日目の家（ヤー）の繁栄祈願が乗瀬御嶽を祭場にし、(3)乗瀬御嶽の神・タマメガの父神・オプカニを祀るオプカニ（ウプ）御嶽を一日目に遥拝する。

これに対して、神歌は祭りの主旨に合致しており、齟齬が認められない。神歌にはこの祭りの核心部がよく表現されている。

このことはどのように理解したらいいだろうか。カムスにおいては、神歌が祭りの本義、古義をよく残しており、儀礼の方がなんらかの事情によっていささか変容したとみるべきではなかろうか。

その事情は、次に上げるカムスの由来譚（一）をみていくことで、明らかになると考えられる。

カムスの由来譚（一）　カムスがどのようにして始まったかを語る山

来譚は、二話ある。そのうちの一話が、大川（一九七四、一二二・一二四頁）に「乗瀬お嶽のかむすの由来」と題して収録されている。次にこれを引用する。

宮古が琉球国王に統治されていた頃、伊良部々落の住民に対し、中山王へ貢物を持って行くように、蔵元の頭から命令された。時の与人はこれを受けて乗組員の選抜に当たったけれども、一人の希望者も出ず止むなく抽選によって乗組員を決めたという。フズ（抽選）は若者たちの名前を紙片に書きそれを丸めてお膳に乗せて、お膳を振って名前を記した紙片を落とし、落ちた数の多い者から四十名を選んで乗組員とした。当時は主従の関係は絶対服従せねばならず、四十人の若者たちは、愈々決意して出発の日を待っていた。

さて、出発に先立って乗瀬お嶽に願を立て、無事にこの大任が果たされて帰島できるように祈願をして出発したという。彼等は、無事貢物を収納して帰路についたけれども、途中大時化にあい漂流した。幸に支那の船舶に救助され、支那へ連れて行かれた。支那では、いろいろと温かい介抱を受けて、全員無事に帰島することが出来た。島では無事帰島できたことを大いに悦び、このように航海安全が叶えられたのは、乗瀬お嶽の神様のご加護のおかげであるということを深く信じ、そのご恩に報いるため乗瀬お嶽で願解きの祭りを行なったのがその始まりである。爾来、乗組員の子孫（但し女に限るが嫁は除く）をユウキウマ（祭に参加する女のこと）と言ってカンスに出る。毎年陰暦の十一月か、十二月の月の始めで支干に合わせ、乗瀬お嶽で五日四晩籠って願う。今ではこの祭のことをカムスオリといい、祭が終って帰ることをカムスノーリといっている。奇跡か偶然か、カムスがお嶽に行く時間に北風となり、祭事が終って帰る時は南風にかわるといい伝えがある。その真偽については不明である。

概要　この由来譚（一）の概要は、次にようにまとめられるだろう。四〇人の船子（若者）が乗瀬御嶽の神に渡海安全を祈願し、無事に帰島できたので、乗瀬御嶽で報恩の願解きの祭りをした。これが一一月と一二月（引用文の「一一月か、一二月」が誤りであることは前述した）に執り行うカムスの始まりである。そして、四〇人の船子の子孫・一門からユーキウマが出て、カムスの司祭者になった。

なお、補説しておくが、船子（若者）たちが報恩の祭りをしたとあるが、これは彼らが祭料を提供し、カムスに奉仕したことを意味していよう。

乗瀬御嶽のカムス　まず、注目すべきことは、このカムスの由来譚（一）のタイトルが「乗瀬お嶽のかむすの由来」となっていることである。このタイトルは、カムスが渡海安全を保証した乗瀬御嶽の神徳に由来していると説く由来譚（一）の内容を実によく示している。

そして、この乗瀬御嶽の神威（渡海安全）を強調するカムスの由来譚（一）は、カムスにおける乗瀬御嶽にかかわる儀礼(1)二日目の名主、(2)三日目の家の繁栄祈願、(3)一日目のオプカニ御嶽遥拝）とかなり関連していると想定される。このように想定することによって、元来カムスと無縁なはずだった乗瀬御嶽が儀礼の領域でカムスに関与してきた背景が、透けて見えてくる。すなわち、乗瀬御嶽の神威（渡海安全）がカムスに影響を与え、カムスの儀礼にいささかの変容をもたらし、「乗瀬御嶽のカムス」と言えるほどになったと推測されるのである。

乗瀬御嶽の関与　では、なぜ乗瀬御嶽がカムスに関与してきて、「乗瀬御嶽のカムス」と称されるほどになったのだろうか。これには、カムスと乗瀬御嶽の伝承に共通、類似する点があり、両者が接近して接合・融合しやすい状況にあったからだと考えられる。

乗瀬御嶽の由来譚　そこで次に、この乗瀬御嶽の性格を知るためにこ

の御嶽の山来譚をみることにする。乗瀬御嶽の由来譚は五話、採録されている。その内訳は、近世の伝承が二話、現行の伝承が三話である。

『琉球国由来記』の伝承　近世の伝承の一つ目は、一七一三年に成立した『琉球国由来記』巻二十に記されている。次の引用は外間守善・波照間永吉（一九九七、四八〇頁）による。

24　乗瀬御嶽　女神。玉メガト唱（伊良部村前磯辺ニ有。）諸立願ニ付、恵良部村崇敬仕ル事。

由来。往昔、伊良部村百姓、容顔美麗成娘ヲ産ミ、余ニ厳シケレバ、世人、名ヲバ玉メガトゾ呼ケル。十五六歳ノ頃、潮汲ニ乗瀬ノ浜ヘ遣シケルニ、行衛モシラズ失ニケリ。父母啼悲ミ、尋ケレドモ見ヘザリケレ。三ケ月ヲ経テ、姿形モ違ハズ乗瀬山ノ麓ニ忙然トシテイミケル。父母無限祝ヒ、抱付ケレバ袖ヲ引チギリ、我ハ是、此島守護ノ神ニ成トテ、乗瀬山ニ飛入、掻消様ニ失ニケル。父母泣々引切ケル衣ノ袖ヲ娘ノ形見トテ乗瀬山ニ葬置、神ト号シ拝タルトナリ。

『遺老説傳』の伝承　近世の伝承の二つ目は、一つ目とほぼ同じ内容の由来譚で、一七四五年に成立した『遺老説傳』（『球陽』外巻）巻二に記されている。次の引用は嘉手納宗徳（一九七八、一三四・一三五頁）による。

75　一、昔、宮古山伊良部邑に、一人氏有り、一女子を産下す。此の女、生質敏捷、姿色無比なり。父母深く之れを愛惜すること、珍の如く宝の如し。郷人之れを見、皆称賛せざるは無し。故に之れを称して玉美嘉と曰ふ。年十五歳に至り、偶、海辺に往きて潮水を汲むの時、忽ち化して神（神名を玉美嘉と曰ふ）と為り、竟に回り来るを見ず。父母大いに驚き、徧く各処に往き、之れを尋ね之れを問ふも、而も其の踪跡を獲ず。已に三ケ月を歴て、乗瀬嶽下に出現す。父母之れを見て、歓喜極まり無く、忙ぎ跑せて之れを抱くに、神女袖を断ち、而して起ちて曰く、吾、已に護島の神と為る。以て暫くも住まるべからずと。即ち其の嶽に飛び入る。父母之れを視て放声大哭し、遂に其の断つ所の袖を将て、此の嶽に収む。時人之れを聞き、以て神嶽と為す。而今、福を祈る者、必ず此に詣り、以て祭祀を致す。

現行の由来譚　現行の伝承としては、大川（一九七四、九六・九七頁）が聞き書きを採録している。次にその由来譚を要約して記す。

乗瀬御嶽の祭神、タマメガは航海の守護神として崇拝されている。フナカ川の北方のオプサトの百姓オプカニ夫婦には、タマメガという美人の一人娘がいた。あまり美しかったので、一五・六歳の妙齢のころから外に出る時は顔に鍋の煤をつけた。

こうしたある年、島は旱魃に襲われて苦しんだ。雨乞いの神事以外にこの危難を救う道はないということになったが、神歌や祭り方をだれも知らなかった。信望の篤いオプカニはこの祭りの仕方を習うために八重山に向かった。北風に乗って八重山に渡海したオプカニは、南風に乗って帰るはずである。父の渡海安全を願っていたタマメガは、やがて南風の吹いたのをとても喜び、豆腐料理で父を歓待しようとしてにがりを求めて乗瀬の浜に潮汲みに行った。ところが、あまり急いでいたので煤をつけるのを忘れ、そのまま行方知れずになった。母はその行方を求めたが、見つからなかった。やがて無事に戻ったオプカニや村人も探したが、その行方は杳として知れなかった。

それから三か月経ったある日、乗瀬山で機を織る音が聞こえ、その夜タマメガが現れた。両親は彼女に抱きつこうとしたところ、タマメガは袖を振り切り、「私はこの島の護り神になった」と言い残して乗瀬山に消えてしまった。そこで、この袖を乗瀬山に葬って御嶽の神として祀った、という。

この他、この由来譚と同工異曲の伝承を、遠藤庄治（一九八九、二八三～二八七頁）が「乗瀬御嶽由来」として二話、採録している。

島の守護神と渡海安全の神　以上の五話には、その内容が三百年近くほとんど変わらない部分と変わっている部分がある。

五話に共通している話柄は次のとおりで、これは近世中期の二話の話柄と同じである。美人のタマメガが一五・六歳のころ、乗瀬の浜で潮汲みにいったまま行方知れずになり、三か月後に乗瀬山の麓に出現し、島の守護神になると告げ、形見の袖を残して乗瀬御嶽に消えた。そこで、この袖を乗瀬山に葬って御嶽とした。

これに対して、現行の由来譚はこれに次のような話柄を加上している。父・オプカニが雨乞いの神事を習得するために北風を利用して八重山に渡り、南風に乗って帰島しようとし、その渡海安全をタマメガが祈った。また、タマメガが潮汲みをしたのは、父の帰島を祝って豆腐を作るためである。そして、タマメガは乗瀬山で機織りをしていた。

以上、五話の要点は、タマメガが島の守護神になったと説くところにある。そして、現行の由来譚は渡海安全の女神としての側面を強調している。

近世中期に記録された二話が、現行の由来譚のように島と八重山を往来する渡海安全の話柄を当初から持っていたのか、持たなかったのかは、にわかに決めかねるところである。しかし、素直に読み取ると、島の守護神としてのタマメガの神威に渡海安全の神威が加上されたとみるのが、妥当ではなかろうか。

このことは、カムスの本義、古義をよく残している神歌を見ることによって裏付けられる。カンナーギアヤグとサラパヤシを見ると、乗瀬御嶽の神は「助け根（タスキーニ）」の神・「助け神（タスキガン）」と言い換えられ、フナウサギを見ると、乗瀬御嶽の神は渡海安全の神としてとくに挙げられていない。乗瀬御嶽の神の本来の像は、「助け神」、すなわち「島の守護神」であり、「渡海安全の神」ではないのである。

こうして見てくると、乗瀬御嶽の神威（渡海安全）を強調するカムスの由来譚（一）が、現行の乗瀬御嶽の由来譚のタマメガのあり方（渡海安全の女神）を踏まえているとわかる。

祭る者と祭られる者　乗瀬御嶽の由来譚の五話は、タマメガが島の守護神になった由来を説いている。しかし、これは正確にいえば彼女が乗瀬の神を祭る神女になったということだろう。タマメガは乗瀬の神に魅入られ、神の嫁になったのである。とくに現行の乗瀬御嶽の由来譚はタマメガが機を織っていたと語っているが、神衣を織るのは太古から神女・神の嫁の務めだった。タマメガのタマ自体が霊の義で、彼女のもつ霊的性格をよく示している。そして、神に仕える者・神の声を伝える者は一般の人からみると神自身にも見え、時には神として語られることになる。村人がタマメガを「生き神」だというのはこのためだろう。祭る者と祭られる者の関係は、紙一重である。

とくに現行の乗瀬御嶽の由来譚のタマメガは、北風に乗って八重山に至り、南風に乗って島に帰る父・オプカニの渡海安全を祈願しており、その祈願は成就している。タマメガは渡海安全を祈願する神女である。それと同時に、タマメガは渡海安全を適える神でもある。

この点、カムスにおける四〇（ユス）の船子のオバー（ユーキウマ）も、タマメガと同様のあり方をしている。三日目の夜中御願（ユナハウガン）で、船子のオバーは北風に乗って島に来訪した主神・唐の神を南風に乗せて船で送り出している。柳田國男（一九六二、二八頁）は、カムスという「一年一度の祭の日を境に、定まった方角の風が吹き出す」ことに注目し、島人のもつ海上の道の知識がいかに正確だったかを説いている。右の記述は正しくは「一年に二度の祭りの日」とあるべきだが、村人は北風の吹き荒ぶ冬に定まった方角（南）から風が吹き出す日を知っていて、これを祭りの三日目にあて、船子のオバーが唐の神を送り出している。この時にうたう神歌・フナウサギをみると、船子のオバーは唐の神の乗る船の渡海安全を祈願する神女であり、同時にこの神の船を

操る船子神になって渡海安全を全うしている。

このように、タマメガと船子のオバーのきわめて共通したあり方をみてくると、カムスの由来譚(一)におけるタマメガと船子のオバーの繋がりが明快に見えてくる。カムスの由来譚(一)によると、タマメガが島と首里、唐を往来する四〇人の船子の渡海安全を保証し、その船子の一門から船子のオバーが出ている。すなわち、タマメガの加護を受けた船子から船子のオバーが生まれているので、このカムスの由来譚(一)の論理でいくと、タマメガの霊力を受け継ぐものが船子のオバーだといえる。船子のオバーは、それぞれにいま一人のタマメガだというのである。

乗瀬御嶽とカムシャー　カムスの主たる祭場・カムシャーは、地理的に乗瀬御嶽と隣接している。また、二日目の夜中御願を渡口の浜で執り行っているが、これは渡海安全の女神が鎮座する乗瀬御嶽の前でする儀礼とも見られがちで、タマメガが唐への渡海を加護するようにとられやすかった。このように、二つの聖地が隣接していることも、カムスと乗瀬御嶽を接合させたもう一つの背景だったろう。

ただし、夜中御願で渡海安全を呪祷する神歌(フナウサギ)には乗瀬御嶽の神が登場しておらず、ここに乗瀬御嶽と無縁なカムスの本義・古義がよく示されている。

カムスの由来譚(一)と儀礼の連動　このようにタマメガと船子のオバーの関係は密接であり、乗瀬御嶽の神威(渡海安全)とカムスの祭祀世界は相似し、両者の聖域も隣接している。以上から、カムスが「乗瀬御嶽のカムス」であるように語られ、カムスの由来譚(一)が「乗瀬御嶽のカムス」の正当性を主張しはじめたと考えられる。

するとこれと連動して、乗瀬御嶽関係の儀礼(1)一日目の名主(ナーメス)、(2)三日目の家(ヤー)の繁栄祈願、(3)一日目のオプカニ御嶽遥拝)が生じたと考えられる。すなわち、(1)一日目の名主は二日目の個々の祈願から派生したと考えられる。また、(2)乗瀬御嶽における家の繁栄祈願は一一月のカムスでしか執り行われていないが、この定着したとは言いがたい状況はいわゆる「乗瀬御嶽のカムス」の歴史が浅いことに関係しているのかも知れない。そして、(3)一日目のオプニカ御嶽遥拝にしても、単なる付加にすぎないものである。

カムスの由来譚(一)の成立時期　こうしてみると、カムスの由来譚(一)は乗瀬御嶽の神威(渡海安全)を取り込んでいるので、カムスの由来譚(一)の成立は現行の乗瀬御嶽の由来譚が成立した後だと推測できる。少なくともカムスの由来譚(一)の成立は、タマメガの渡海安全の神威を説かない近世の文献の成立した一七〇〇年の初頭あるいは中葉まで溯らないと考えられる。

そして、カムスの由来譚(一)の成立と連動する乗瀬御嶽関係の儀礼の成立は、さらにカムスの由来譚(一)が成立した後だと推測できる。

女性神役継承制と男性年齢階梯制のリンク　以上のように、カムスの由来譚(一)は乗瀬御嶽とのかかわりを説いているが、同時に女性神役継承制と男性年齢階梯制をリンクすることでシマ(村落共同体)が栄えるとも説いている。前述したように、カムスは女性神役継承制と男性年齢階梯制を巧みにリンクした祭りだった。

カムスの由来譚(一)における屈強の四〇名の船子とは祭りを支えるシヂューナレなどの若者であり、このような若者を加護するのがタマメガ(女神)やユーキウマ(神女)である。そして、船子(若者)が、自分たちを加護してくれた神(そして神女)の恩に報いるために願解きをしたという。すなわち、この若者たちはカムスのために祭料を提供し、祭りに奉仕したというのである。

このように、女性神役継承制と男性年齢階梯制のリンクを力説することが、カムスの由来譚(一)のもう一つの主題だと考えられる。

男女による役割分担　そもそも、沖縄には一般的に性による役割分担がある。男性はよく働いて富をシマにもたらすように期待されている。とくに海に出、他所から富をシマにもたらすのは男性にかぎられ、その渡海は死と隣り合わせだった。これに対して、女性はこういう男性を霊的に加護しようとしている。この神女たちに対して、男性たちは神女たちに奉仕している。このように、男女による役割分担が円環的に機能することで、シマは繁栄するのである。もとより、女性も田畑で労働して富を得ているが、およそこの双分的な役割分担が一般的である。伊良部・仲地もその例外ではない。

船子と船子のオバー　カムスの由来譚（一）における神女たちと男性たちのリンクのし方は、きわめて巧妙である。由来譚（一）で四〇人の船子（若者）は籤で選ばれていたが、現実の四〇の船子のオバー（ユーキウマ）もそれぞれの一門から籤で選ばれている。また、山来譚（一）では四〇の船子のオバーが島と唐を無事に往来した四〇人の船子の形代のように登場しているが、神送りの儀礼では唐の神の渡海安全を祈願し、自らも船子になって無事に送り帰している。すなわち、祭りにおける四〇の船子のオバーは、島と唐の間の渡海安全を保証することを職掌にしている（この他、ユーキウマとして唐の神に世を乞うことも職掌にしている）。

儀礼の側の論理からみると、四〇の船子のオバーが先にあり、その加護によって各一門から出た四〇人の船子（若者）が島と首里・唐の間を無事に渡海できたことになる。島と首里・唐の間を漂流して助かった船子の一門から船子のオバー（神女）が生まれたという語りは、逆転した説明である。

一門の神女　四〇の船子のオバー（ユーキウマ）は各一門（父系血縁）から出る神女だが、これは沖縄本島とその離島に見られるクディに相当する。

比嘉政夫（一九八三、五九九・六〇〇頁）によると、クディは門中の祖霊神に仕える神役で、オコデ、クディングヮともよばれ、祖先神を崇め、媒介者、司祭者として、一族を代表して村落の祭祀に参加しているという。この他、クディは一門の者のために世を祈願したり、祓い清めをしている。

ユーキウマがシマ（村落共同体）レベルの年中行事で司祭するのはカムスだけだが、日常生活における職掌はクディと同じであり、一門の男の渡海安全を祈るのも、この神女のなすべき職掌の一つである。

前述したように、この一年間に神女やその一門に慶事（年祝い・新築・結婚・誕生など）があった場合、カムスの二日目か四日目の夜に、慶事のあった者が神饌を神屋のオコマ座に供えていた。これは、慶事が一門のユーキウマの日常的な祈願や祓い清めによるお蔭だと考えての儀礼だろう。

久高島のウムリングヮ　このユーキウマのあり方は、とくに沖縄本島の離島・久高島のウムリングヮ（一門ユタともいい、沖縄本島のクディに相当する）のあり方と共通している。

畠山篤（一九八一、八六～八八頁）によると、父系血縁の女性から選ばれたウムリングヮがカンジャナシーという祭り（四月と九月に執行する）でニライカナイの神々を送迎して世果報を乞い受けている。そして、ウムリングヮには、一門の者の繁栄（家の祓い清めなど）を祈願し、死霊（海難死した者の霊など）を供養する働きもある。

このように、久高島のウムリングヮのあり方が伊良部島のユーキウマ（船子のオバー）のあり方ときわめて共通しているので、ウムリングヮのあり方からユーキウマの一門における本来のあり方が類推できる。

男性年齢階梯集団の奉仕　このように、一門のユーキウマや司に加護された男たち、すなわち男性年齢階梯集団（御願主、シヂューナレ、

御願供、カニサズ）は、現に祭りにおいて奉仕している。具体的には、カニサズは祭りの案内をし、御願供はカムスの・日日に務めている。また、シヂューナレは神饌の準備をし、とくに五日目は本人が列席して自分たちのために祈ってくれた神女たちを出迎えている。こうして、男性年齢階梯集団は女性神役に奉仕している。

このようにして、女性神役と男性年齢階梯集団がリンクして祭りが円滑に執り行われているが、カムスの由来譚（一）はこのリンクの意義を説いたのである。すなわち、両集団がうまく機能してこそ、カムスが円滑に執り行われてシマ（村落共同体）が栄えると説いたのである。

神観念の合理化　カムスの由来譚（一）は、四〇人の船子（若者）の・門から船子のオバー（ユーキウマ）が生まれたように語っている。この語りのねらうところは何だろうか。

祭りは神女中心の神観念に基づいて執り行われ、その世界は神聖さゆえに秘されがちである。したがって、その祭祀世界は祭りの外部の者には容易に理解されがたい。神女たちに仕える男性年齢階梯集団もまた、厳密に言えば外部者集団である。ここに、祭りがより円滑に運営されるために、祭りの意義が外部の男性年齢階梯集団にも理解できるように説明する必要が生じる。こうして、男の世俗的で鮮明な体験や知識を踏まえ、若者たちを主役とし、女性神役を脇役にする由来譚（一）が形成されたと考えられる。

逆らいがたい権力（王権）のために危険きわまりない渡海をしなければならないというのは、島の男たちにとっては切実感のある設定である。この苦難に満ちた状況を乗り切った若者の・門から神女（ユーキウマ）が生まれ、自分たちを加護してくれたタマメガ（そしてその司）に感謝してカムスが始まったという語りは、男性年齢階梯集団の若者の心を大いに捉えたと思われる。このように、神女中心の祭祀世界を基層にし、これに男たちの世界観を大きく取り入れて仕立て上げたのが、カムスの由来譚（一）なのである。

来訪神の原郷・「渡の国」が「唐の国」になったのも、村人（とくに若者たち）が神女たちの観想する観念的な「渡の国」では納得しがたく、現実の唐（中国）として理解したからだろう。神の国は北方に位置すると観想されているが、現実の唐は西方にある。このような矛盾をあえて犯してまでも、「渡」が「唐」に変容したのは、男たちの地理観を優先させたからだと考えられる。

このような合理化が定着してくると、「渡の神」に仕える船子のオバーの着る神衣裳も、「唐の神」に仕える神女にふさわしいように中国風になるのである。

神屋での形成　このようなカムスの由来譚（一）は、毎年、・一月と・二月に神屋で神々とともに四泊五日の御籠りをする四三名の神女が、作り出したと考えられる。すなわち、祭りをより円滑に運営してシマをさらに繁栄させるために、神女たちが、さまざまな情報、すなわち祭りを支える集団、来訪神の送迎（祭祀儀礼）、隣接する乗瀬御嶽の神威とその由来譚（以上は主に祭・聖・女の側の情報）、王権（権力）、男性（若者）の漂流体験、唐（中国）や沖縄に対する地理観（以上は主に政・俗・男の側の情報）などを巧みに組み合わせて語り出したと考えられる。

祭・聖の側の情報を知悉し、なおかつ男の側の情報にも遺漏なく配慮できるのは、シマの繁栄を祭りで達成しようとする神女たちしかいないだろう。そして、この両性の分担が最も総合化・融合化してなんらかの幻想を生み出しうる場は、神女たちの信仰心が最も昂揚する四泊五日の忌み籠もりをする神屋以外に考えられない。日中の神女たちは神事に忙殺され、夜は夜で三日目の深夜には神送りをし、毎夜村落から隔離された狭い神屋のなかで四三名の神女たちが神々を慰める歌

舞を奏している。それで、神女たちの緊張は長時間に及んで、睡眠時間が極端に少なくなり、カムスを終えると同時に神女たちは数日間も寝込むという。このように一つの主題を持つ濃密な時間と空間において抱く幻想は、似たようなものになるだろう。ましてや、ユーキウマ（四〇の船子のオバー）はこの体験を年に二回ずつ終身続けるわけだから、その幻想は村人のだれもが納得できるものになりえたろう。いうまでもなく、その幻想がカムスの由来譚（一）である。

福田晃（一九九八、二〜五二頁）は、NHKスペシャル［心と脳］の第六回の放映「果てしなき脳宇宙―無意識と創造性―」を引用しながら、人間の脳には妄想が勝手に振る舞わないように安定化させる仕掛けがあるが、その安定化装置がゆるむと、幻覚が生じ、また芸術的な創造性の爆発や深い宗教体験の発生をうながす、と説いている。ついで氏は、奄美・沖縄の巫者なるユタの具体例を示しながら、脳の安全化装置のゆるみが宗教文学、宗教音楽、宗教絵画、宗教舞踊を生み出す源泉である、と論じている。

筆者は、忌み籠もり中の神屋の調査はできなかったが、神屋での忌み籠もりが脳の安全化装置をゆるませて、内外のさまざまな情報が脳に入りやすくなり、また無意識からの情報も流れ込む状況にあることは、容易に想像できる。カムスの由来譚（一）は、このような神屋の状況のなかで、形成されたといえるだろう。

カムスの由来譚（二）　もう一つのカムスの由来譚（二）は、古橋信孝（一九八九、九九頁）に収録されている。これは、一九七八年に伊良部島で西原マツ刀自（一九〇一年生）が本当の話しとして語ったのを古橋氏が聞いたものである。次にこれを引用する。

琉球の王が王妃に美しい女を求めており、宮古にも美しい女を四十名出すようにいってくる。四十名が選ばれ沖縄に着くが、王妃は決まっており、かの女たちは帰路につく。途中時化にあい漂流。神に助けてくれるように祈願する。するとカウス（葛）が海上にずっと延び、そのカウスに従っていくと、部落へ帰りついた。祭にはそのカウスを頭に巻く。

渡海安全　このカムスの由来譚（二）はどれだけ儀礼や神歌を踏まえて祭りのあり方を解き明かしているだろうか。

美しい四〇名の王妃候補者が沖縄から島へ帰る時に、時化にあって渡海安全を祈願したという部分は、四〇（コス）の船子のオバーたちが歌う、(1)夜中御願（ユナカウガン）のおりのフナウサギと、(2)カンナーギアヤグの最後の一節を踏まえていると考えられる。すなわち、四〇名の王妃候補者の後裔が四〇（コス）の船子のオバーであり、その四〇の船子のオバーが祭祀世界では四〇（コス）の船子になり、渡海安全を祈願していることを語っている。しかし、この時カウス（葛）が海上に延び、それに従っていくと島に無事に着いたと語るが、これは青大将（長物）が走っていくように何の障害もなく大海を渡海するというフナウサギの一節（一〇）を、曲解（ないしは誤解）して踏まえた語りだと考えられる。また、四〇名の王妃候補者が美人だったというのには、王妃は美人なはずだという前提もあるだろうが、四〇の船子のオバーをアパラギンマタ（麗しい神女たち）と賛美したカンナーギアヤグの最後の一節を踏まえてのことだとも考えられる。

以上、カムスの由来譚（二）は渡海安全という点でカムスの由来譚（一）と共通している。しかし、渡海安全の神威をもつ乗瀬御嶽（タマメガ）とのかかわりを説くわけでもない。また、この漂流譚に登場するのは四〇名の女性だけなので、女性神役継承制を説くだけであり、男性年齢階梯集団とのリンクを説くわけでもない。

周縁部の語り　このカムスの由来譚（二）が踏まえている祭祀世界は断片的であり、しかも曲解（誤解）もある。このようにカムスの由来譚（二）をカムスの由来譚（一）と比較してみると、一体このカムスの

由来譚（一）の意図するものが何なのか、理解に苦しむところである。当然のことながら、カムスの由来譚（一）のように儀礼を変えていく力もない。

しかし、これを本当の話、真実の話だと信じて語ろうとするところに、もう一つの語りのレベルを想定しなければならない。すなわち、祭りに直接かかわらない者、祭りを積極的に支える立場にない者のあいだでは、このような由来譚の方が理解しやすく、語りやすかったと思われる。祭りのかなり周縁部においては、このような由来譚で祭りを理解する人々もいたのである。

結び

本論のねらい　本論は、まず祭りを支える集団（祭祀組織など）、そしてカムスの儀礼（次第）と歌謡（主に神歌）を記述し、次いでこの祭りの構造と本義を明らかにした。そして、この儀礼、歌謡、由来譚（説話）の関係を探り、カムスの由来譚がどのように形成され、機能してきたかを考えてみた。

祭りの変容　カムスは唐の神を主神とする諸々の神にあらゆる世果報（幸）を祈願し、感謝する祭りで、元来、乗瀬御嶽と無関係だった。このことは、祭りの主旨・本義をよく残す神歌（カンナーギアヤグ・サラパヤシ）からわかり、また唐の神の渡海安全を祈願する神歌（フナウサギ）に渡海安全の神としてタマメガが登場していないことからもわかる。

これが、乗瀬御嶽の神威として渡海安全を強調する現行の乗瀬御嶽の由来譚をカムスが大きく取り入れてカムスの由来譚（一）を形成し、このカムスの由来譚（一）の形成と連動して乗瀬御嶽関係の儀礼が生じたと考えられる。

祭祀体制の維持　カムスの由来譚（一）はカムスの由来を説き、その正当性を主張している。

カムスの由来譚（一）では、乗瀬御嶽の生き神・タマメガが四〇人の船子の渡海安全を保証したが、このタマメガの渡海安全の神威が四〇（ユク）の船子のオバー（神女）に継承されたように語り、また四〇人の船子の一門から四〇の船子のオバーが生まれたと語る。すなわち、乗瀬御嶽のタマメガ（司祭者は乗瀬御嶽の司）も四〇の船子のオバーも、由来譚（一）において四〇人の船子として形象されている若者たち、すなわち男性年齢階梯集団を加護している。そして、その男性年齢階梯集団は、女性神役に奉仕している。

このようにカムスの由来譚（一）は、男性年齢階梯集団と女性神役がリンクしてこそシマ（村落共同体）が円環的に栄えると説き、その繁栄をもたらすために祭祀体制を維持し、カムスを継続させようとしている。

周縁部の語り　このような本格的な「正伝」ともいうべきカムスの由来譚（一）に対して、カムスの由来譚（二）は「俗伝」ともいうべきものになっている。語りにはレベルがあり、カムスの由来譚（二）は祭りのかなり周縁部にいる者の語りである。

〈付記〉この調査にあたって村の人たちにご協力をいただいた。その主要なインフォーマントのお名前をあげ、深甚なる謝意を表したい。川満マツ・大城カメ・池間カニメガ・久貝タケ・洲鎌吉子・川満貞子・池間方福。

〈引用文献・参照文献〉

伊良部村史編纂委員会　一九七八　『伊良部村史』（伊良部村役場）
遠藤庄治　一九八九　『いらぶの民話』（伊良部町）
大川恵良　一九七四　『伊良部郷土誌』（私家版）
折口信夫　一九七六　「沖縄に存する我が古代信仰の残孽」『折口信夫全集第十六巻』（中央公論社）

嘉手納宗徳　一九七八『球陽外巻　遺老説傳』(角川書店)
畠山　篤　一九八一「カンジャナシー」『沖縄県久高島の祭り』(白帝社)
比嘉政夫　一九八三「おこで」『沖縄大百科事典(上)』(沖縄タイムス)
平敷令治　一九九〇「カムウリ――宮古・伊良部の冬祭――」『沖縄の祭祀と信仰』(第一書房)
福田　晃　一九九八「宗教伝承の始原」『宗教伝承の世界』(三弥井書店)
吉橋信孝　一九八九「ウソの話とホントの話」『幻想の古代』(新典社)
外間守善・新里幸昭　一九七八『南島歌謡大成　Ⅲ宮古篇』(角川書店)
外間守善・波照間永吉　一九九七『定本　琉球国由来記』(角川書店)
柳田國男　一九六二「海上の道」『定本　柳田國男集　第一巻』(筑摩書房)